

普及指導員の行動に関する調査研究報告書

平成 22 年 3 月

京都大学

こころの未来研究センター

内田 由紀子¹ 竹村 幸祐² 吉川 左紀子³

(協力: 近畿農政局、近畿ブロック普及活動研究会)

¹ 京都大学こころの未来研究センター(助教)

² 京都大学こころの未来研究センター(教務補佐員)、現所属:ブリティッシュ・コロンビア大学(研究員)

³ 京都大学こころの未来研究センター(教授・センター長)

報告書 目 次

1. 調査の概要	2
2. 調査方法	4
3. 回答者の構成	5
4. 尊敬される普及指導員の姿	7
5. 地域の抱える問題のタイプと有効な支援	11
6. 地域の抱える問題のタイプと普及指導員の必要とするサポート	25
7. 普及活動の必要性	32
8. 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因	35
9. 若年者ステレオタイプに関連する結果	45
10. OJT の必要性に関連する結果	48
11. 地域に足を運ぶ頻度の減少について	55
12. 総合考察	56
謝辞	62
参考文献・参考資料	63

1. 調査の概要

1. 調査目的

本研究は、京都大学こころの未来研究センター教員提案型連携プロジェクト「ソーシャル・ネットワークの機能：グループ内の『思いやり』の性質」（プロジェクト No.08-1-01：研究代表者：内田由紀子）の一環として行われた。

プロジェクトの目的は、人と人とのつながりや、相手に対する「思いやり」がうまく機能する場面とはどういったものであるのか、「資源」が「資源」として機能しているネットワークはどのような性質をもっているのかを探ることである。その中でも特に農村コミュニティのネットワークに注目し、そのネットワークの生成・維持に貢献している「人とのつながり」を資源として活かす専門家ともいえる「普及指導員」の役割と機能を明らかにすることとした。

全国普及改良支援協会のホームページでは、普及指導員は「農業経営と農村生活の向上に取り組む農業者の様々な活動を支えています」とあり、その役割には地域の担い手の育成、産地のサポート、地域振興などのサポート事業が挙げられている。とりわけ、「普及指導員は、こうした産地を発展させたり、新たな産地を作るよう農業者等を仕向けたり、さらに地元の農協や市町村と連携して、農業者の組織化支援などのコーディネート活動を行っています」という記述には、普及指導という仕事が日本の農村コミュニティにおいて人と人のこころを「つなぐ」役割を担ってきた職務であることが示されている。本プロジェクトでの取り組みを通じて、普及指導員の人たちが、長年経験を積む中で培ってきた、人のこころを動かすスキルを明らかにすることをめざしたい。現代の日本社会において、「つなぐ」仕事は学校や医療現場など、様々なところで必要とされており、普及指導員が持つスキルを解明し、またそのトレーニング法を開発することは、今後重要になるに違いないと考えるからである。

2. 調査の経緯

京都大学こころの未来研究センターのプロジェクトが普及指導員の役割に注目することとなったきっかけは、平成 20 年、近畿農政局生産経営流通部経営支援課の職員の方から、普及指導員という専門職の人たちが農村の中で果たしてきた役割について知ってもらいたい、という依頼があったことに端を発する。その後農業現場を訪れ、実際の普及指導員がどのようなビジョンをもって「つなぐ」仕事を行っているのかを知る機会があった。また平成 20 年 10 月には普及事業 60 周年シンポジウムで吉川左紀子センター長が「信頼形成のコミュニケーション：心理学の知見から」というタイトルでの講演を行い、内田由紀子助教もパネルディスカッションのコメンテーターとして参加、近畿 6 府県の数多くの普及指導員の方々と意見交換を行う機会を得た。その際参加した普及指導員の方から、「普及が行っている『つなぐ』仕事の役割を具体的に心理学のデータで示すことは可能なのだろうか？」という意見

が寄せられた。「つなぐ」仕事の成果は、経済的効果などの尺度では計測できず、それゆえに地域の活性化や農村ネットワークの形成といった「こころの働き」についての実績は外に表しにくい現状があるという。

そこで、平成 21 年度に近畿農政局ならびに近畿ブロック普及活動研究会の協力の下、「普及指導員の行動に関する調査研究」に取り組むこととなった。

3. 調査結果の活用並びに長期計画

今年度は近畿における調査結果をまとめ普及指導員やその組織が持っている資質、長所などが、実際の農業生産だけではなく、地域づくりなどにどのように活かされているのか、その成果を具体的なデータとして示すことを目標としている。さらに、普及組織で活用可能なデータ(普及指導員が持つスキルとその特徴についてのモデル化や、事例タイプ別の有効解決方法を明らかにするなど)をフィードバックすることを目指している。

近畿での本調査結果をふまえ、次年度においては調査対象を全国の普及指導員に広げることにより、人と人をつなぐ仕事を先駆的に実践してきた普及活動について、全国的な観点から分析する。さらには普及活動のもたらす効果をより具体的に示すために、今回の調査の回答者には再度調査に協力を要請し、普及活動を通じての普及対象や地域の変化を分析する。

学術的な貢献としては、農村コミュニティの社会関係資本(ソーシャル・キャピタル)の役割と、日本の農村文化における対人関係の特徴などについて明らかにしたうえで、人のこころのつながりがどのように形成され、地域社会でどのような機能を果たしているのかを明らかにする。「農」という生業が日本の社会構造に果たす役割や、これまで直感的かつ素朴に理解されていた「相手からの思いやりを肯定的に受け取ることができる背景」とは何かという対人ネットワークに関連する視点、そして信頼を形成するためにはどのようにすればよいのか、というコミュニケーションについてのより詳細な理解を進めることを目指している。

2. 調査方法

- ① 調査時期: 2009年7月上旬～8月上旬
- ② 調査方法: SurveyMonkey社のサービスを利用してインターネット上に質問票を設置し、質問票サイトのURLを近畿6府県の普及指導員に告知した。また、質問票サイトにアクセスして回答できない場合のために、同じ内容の質問票をExcelで作成し、そのExcelファイルを普及指導員にEメール等で配布した。
- ③ 調査対象: 近畿6府県の普及指導員616名
- ④ 有効回答数: 319名(有効回収率51.8%)
- ⑤ 調査目的: 次の各事項を検討することを目的として実施された。
 1. 尊敬される普及指導員の特徴
 2. 地域の抱える問題のタイプと有効な支援の組み合わせ
 3. 地域の抱える問題のタイプと普及指導員の必要とするサポートの組み合わせ
 4. 普及活動の必要性
 5. 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因

3. 回答者の構成

回答者の性別比を図1に示す。全有効回答者319名のうち、男性は201名、女性は58名、無回答は60名で、全体の60%強を男性が占めていた。次に、本調査の回答者における各年代の比率を図2に示す。40代が最も多く(111名)、次いで50代(77名)、30代(58名)の順で多く、20代(9名)と60代(7名)が少なかった。

平成19年度調べの近畿圏内の普及指導員全体の分布は男性75.9%、女性24.1%であり、無回答者をのぞいて分布の偏りを調べたところ、有意ではなく($\chi^2=0.59$, ns)、母集団とマッチしていることが明らかになった。年代については、近畿圏内普及指導員全体では20代が全体の5.6%、30代が29.2%、40代が39.4%、50代が25.2%、60代が0.6%となっており、今回の回答者は母集団よりも30代が少なかった($\chi^2=14.27$, $p < .006$)。ただし、本調査では無回答層が17.9%いるため、実際に回答者層と母集団と異なっているかどうかは定かではない。

さらに、普及指導員としてのキャリア(経験年数)について、平成3年4月11日付農蚕園芸局長通達「協同農業普及事業基本要綱の運用について」に基づいて、次の4群に分類した: I期(経験年数3年まで)、II期(経験年数4~10年)、III期(経験年数10~15年)、IV期(経験年数15年以上)。本調査の参加者における各グループの比率を見たところ、IV期が最も多くて40%以上に上り、I期は6%に留まった(図3)。

図1. 性別

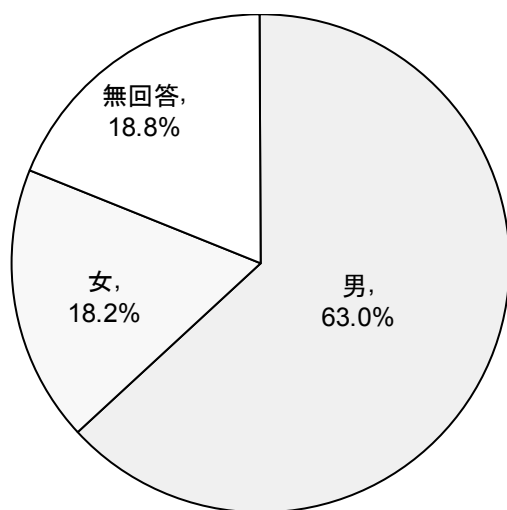


図2. 年代

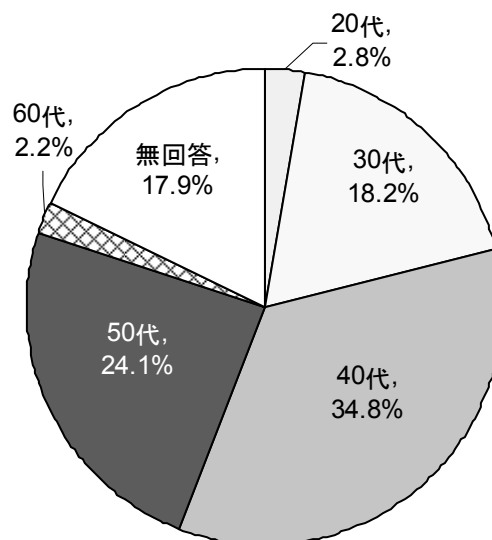
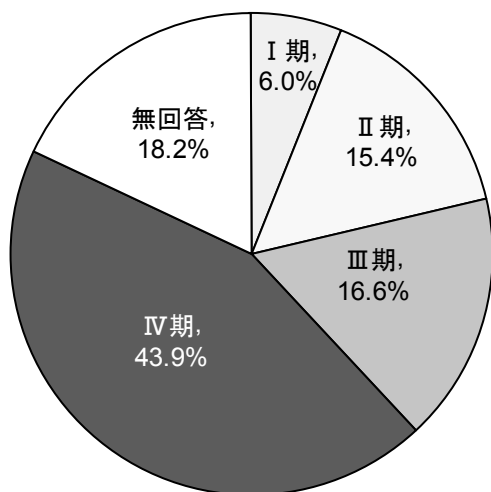


図 3. 普及指導員としてのキャリア(経験年数)



また、府県別の回答者は表1の通りであった。

表 1. 回答者の内訳(府県・男女別)

	男	女	不明	合計
滋賀県	44	8	2	54
	(82%)	(15%)	(4%)	(100%)
京都府	38	13	2	53
	(72%)	(25%)	(4%)	(100%)
大阪府	23	11	0	34
	(68%)	(32%)	(0%)	(100%)
兵庫県	55	12	4	71
	(78%)	(17%)	(6%)	(100%)
奈良県	14	8	0	22
	(64%)	(36%)	(0%)	(100%)
和歌山県	22	5	0	27
	(82%)	(19%)	(0%)	(100%)
不明	5	1	52	58
	(9%)	(2%)	(90%)	(100%)
合計	201	58	60	319
	(63%)	(18%)	(19%)	(100%)

括弧内は各府県内での男女比パーセント

4. 尊敬される普及指導員の姿

説得力と実践力を持つ普及指導員が尊敬されている

目的:職業における目標形成や、仕事上のスキルの獲得において、ロールモデル(職種や役割における模倣・学習の対象となる人、憧れ・理想の対象)の存在はきわめて重要であると考えられる。特に、人をつなぐ役割を果たすとされている普及指導員においては、優れたロールモデルの存在は若手の育成においても重視されていると考えられる。現在の普及指導員達に尊敬する指導員は存在するのか。また、尊敬される普及指導員とはどのような特質を持っているのかを検討する。

方法①:尊敬する普及指導員の有無を各回答者に尋ね、存在する場合にはその人の性別と、何年上の人なのかを回答してもらった。

結果①:92%(292名)の回答者が、尊敬する普及指導員がいる(あるいは過去にいた)と回答した。尊敬する普及指導員がいない(いなかった)と回答したのは7%(21名)のみで、無回答は2%(6名)であった。また、尊敬対象の性別と、回答者の性別のクロス表は表2の通りであった。女性回答者は尊敬する普及指導員の性別に女性を選ぶ傾向が男性回答者よりも高かった($\chi^2(N=238)=50.27, p<.001$)。また、図4に見られるとおり、10年程度上の先輩が対象となっていることが多かった(平均値:13.48, 中央値:11.00)。

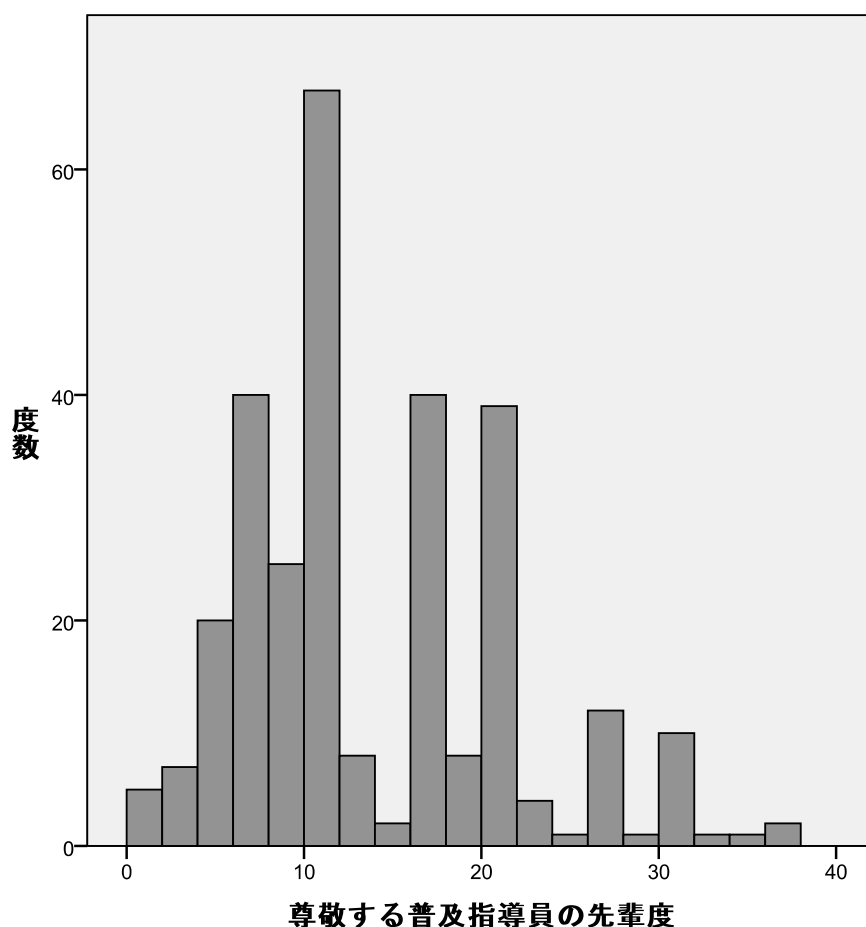
表 2. 回答者と尊敬対象の性別のクロス表

		尊敬する普及指導員の性別		
		男	女	合計
本人の性別	男	175 (96.2%)	7 (3.8%)	182 (100.0%)
	女	34 (60.7%)	22 (39.3%)	56 (100.0%)
合計		209 (87.8%)	29 (12.2%)	238 (100.0%)

括弧内は、本人性別の各水準における男女比パーセント

$\chi^2(N=238)=50.27, p<.001$

図 4. 尊敬対象の先輩度(経験年数が何年上か)



10年程度上の人が尊敬されているのはいずれの理由によるか。例えば近年の普及員数の減少によるために直近の先輩が減少しているためとするならば(近畿ブロック普及活動研究会の平成21年度調査研究報告書参照)、若い普及指導員の方がより年次の高い人を尊敬対象としている可能性がある。そこで、本人の年齢と、尊敬する普及指導員の先輩度の相関を見てみたところ、Pearsonの相関係数($r = -.06, p = .386$)ならびにSpearmanの順位相関係数ともに有意ではなく($\rho = -.04, p = .484$)、普及員数の減少によるものではなかった。

方法②: 尊敬される普及指導員の持つ特徴を具体的に明らかにするべく、普及指導員の特徴として考えられるものを41項目用意し、各項目が自分の尊敬する普及指導員に当てはまるかどうかを、「とてもよく当てはまる」、「当てはまる」、「特に当てはまらない」、の3件法で尋ねた。項目は、普及指導員ならびに普及事業関係者への聞き取り調査や、農林水産省による普及事業ホームページ(<http://www.maff.go.jp>)、農林水産省生産局技術普及課「農業者とともに歩む普及指導員」(平成20年8月発行)、全国農業改良普及支援協会

編「普及指導員養成マニュアル」(平成 18 年発行)等を参考に選定した。自分の尊敬する普及指導員に「当てはまる」と回答された場合には 1 点、「とてもよく当てはまる」と回答された場合には 2 点を与え、そのいずれも選択されなかった場合には 0 点とし、項目ごとに平均得点を算出した。得点が高ければ高いほど、尊敬される普及指導員によく当てはまる特徴であることを意味している。

結果②:表 3 では、回答者全体での平均得点を「全体」の列に示し、得点が高い順に項目を並べ替えており、尊敬される普及指導員の特徴として得点の高いものほど表の上に配置されている。どのような普及指導員を尊敬するかは本人のキャリアによって異なる可能性があることから、回答者本人のキャリア別に各項目の平均得点を算出した結果を示している(「回答者のキャリア別」の 4 列)。表 3 中で灰色に塗りつぶされている行は、その項目の得点にキャリア間で大きな差のあったことを示している。

表 3 に示されているように、尊敬される普及指導員は「**説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる**」や「**知識や技術を実際に活かす**」といった特徴を持つことが明らかになった。これに次いで、「**農業者の視点に立ち、相手の心を理解しようとする**」「**多くの知識・技術を持っている**」「**熱意・情熱をもって人に接している**」「**知識や技術を伝えるのがうまい**」「**新しい人間関係やネットワークを積極的に構築する**」といった項目の得点が高かった。この点については、今後他業種との比較を通して、普及指導員独自の持つ性質について検討していくべきであろう。

またいくつかの項目では、本人のキャリアによって大きく得点の異なることが示された。「**説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる**」「**人を引っ張り続らし、方向転換させる指導力がある**」「**時代の流れを読み、将来に向けてのビジョンを提言する**」「**その人の存在によって周囲に最善の行動を促すことができるカリスマ性**」では、本人のキャリアとともに得点の高くなる傾向が見られた。一方、「**強い信念を持ち、困難なことがあってもあきらめない**」は、Ⅱ期(経験年数 4~10 年)の回答者の間で得点が低かった。

表 3. 尊敬される普及指導員の特徴: 個別項目の得点

	全体	回答者のキャリア別			
		I 期	II 期	III 期	IV 期
説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる	1.49	1.12	1.40	1.55	1.51
知識や技術を実際に活かす	1.44	1.29	1.47	1.51	1.43
農業者の視点に立ち、相手の心を理解しようとする	1.33	1.00	1.32	1.31	1.39
多くの知識・技術を持っている	1.31	1.41	1.28	1.33	1.31
熱意・情熱をもって人に接している	1.29	1.12	1.15	1.39	1.34
知識や技術を伝えるのがうまい	1.28	1.29	1.26	1.39	1.23
新しい人間関係やネットワークを積極的に構築する	1.27	1.29	1.17	1.43	1.26
人を育てる力がある	1.20	1.06	1.13	1.24	1.23
農家や関係者に働きかけて成長を促そうとする	1.20	1.18	1.26	1.18	1.17
人を引っ張り統率し、方向転換させる指導力がある	1.19	.59	1.09	1.20	1.30
決断力がある	1.19	1.06	1.15	1.12	1.26
農業者に自分が何を提供できるのかを考える	1.18	1.00	1.15	1.10	1.20
自ら進んで物事に取り組む	1.18	1.35	1.11	1.10	1.21
農家や関係者のニーズに応じて支援したいという願望が強い	1.18	1.24	1.11	1.31	1.15
地域の中にいろいろな人脈を持っている	1.12	1.06	1.09	1.04	1.14
物事を局部ではなく大所高所からとらえる	1.11	.82	.96	1.12	1.21
強い信念を持ち、困難なことがあってもあきらめない	1.11	1.06	.89	1.12	1.24
時代の流れを読み、将来に向けてのビジョンを提言する	1.10	.59	1.09	1.16	1.17
信頼・尊敬の念で周囲から見られる	1.10	1.00	1.06	1.08	1.20
先例がないことにも進んで取り組む	1.09	1.00	1.04	1.06	1.13
状況を的確に判断し、臨機応変に行動を変える	1.06	.94	.98	1.04	1.10
地域の関係機関と連携し、それぞれの役割分担を行う	1.06	.94	1.13	1.08	1.05
構築された人間関係をメンテナンスし、長期にわたり保持する	1.05	.88	1.09	1.00	1.05
周囲と連携してチームワークを形成する	1.05	1.00	1.19	.98	1.02
問題解決又は目標達成のために必要な取組を順序立てて企画する	1.05	1.18	1.09	1.00	1.06
地域のリーダーを見つけ、育てる	1.04	.71	1.09	1.16	1.05
とらえどころのない現象の中から大事な問題が何かを見つけ出す	1.02	1.00	.87	1.00	1.11
普及センター内や他の普及指導員と連携し、普及組織内で自分の役割を全うできる	1.01	1.06	1.09	.98	.98
自分の能力を信じている、自信がある	1.00	.76	.96	1.02	.99
地域全体の中での自分の役割を理解し、全うしようとする	.98	.88	1.11	1.02	.96
地域全体が目指す目標や、要求する行動基準をよく理解する	.95	.59	.91	1.10	.97
助言や情報提供してくれている人を多く抱えている	.91	.88	.87	.80	.93
その人の存在によって周囲が明るくなるカリスマ性	.87	.88	.87	.94	.87
問題の局部を分析し、本質を緻密に解明する	.85	.94	.81	.76	.89
常に話し合いの中心に位置し、話題を提供する	.85	.65	.85	.92	.83
その人の存在によって周囲に最善の行動を促すことができるカリスマ性	.83	.29	.72	.92	.91
研究機関と連携し、問題解決に必要な研究を進めてもらう	.79	.82	.70	.71	.85
冷静に自分をコントロールできる	.78	.94	.83	.92	.72
情にもろい	.65	.35	.74	.63	.64
細部に神経をつかい、完璧にやろうとする	.59	.59	.49	.61	.57
消費者の視点で考える	.52	.29	.53	.53	.53

註: ①「全体」での得点が高い順に表の上から配置。②灰色に塗りつぶされている項目は、統計的検定(回答者のキャリアを独立変数、得点を従属変数とした分散分析)で有意確率 p が 0.10 未満の効果の見られた項目。

5. 地域の抱える問題のタイプと有効な支援

「関係機関との連携調整」は多くの問題タイプで実施されやすく、実際に地域住民の満足感に対して効果を持っている。「農業者同士の連携」「将来のビジョン提示」は、多くの問題タイプで状況を改善するのに効果を持っている。

目的①：地域の抱える問題のタイプが異なれば、どのような支援が有効に働くかも異なってくると考えられる。どのようなタイプの問題が見られ、どのような普及活動が実施されていたかを検討する。

方法①：尊敬する普及指導員の支援と回答者本人の支援を、問題タイプ別に比較した。具体的には、尊敬する普及指導員がどのようなタイプの問題に直面し、そこでどのような普及活動を実施していたか尋ねるとともに、回答者本人にも過去に経験した状況で特に難しい課題に直面した時の問題のタイプとそこで実施した支援を尋ねた(複数回答可)。この両者を比較することで、尊敬される普及指導員の支援の特徴を、地域の抱える問題のタイプごとに明らかにすることを目指した。

結果①：図 5-1 に尊敬する普及指導員の結果、図 5-2 に回答者本人の結果を示す。図から明らかなように、尊敬する普及指導員と本人のいずれの場合でも「**生産技術に関する問題**」が最も多く、次いで「**農業者の収益・経営状況に関わる問題**」「**地域全体の活性化に関わる問題**」が多かった。

次に、全体としてどのタイプの支援が多く実施されていたかを検討した。図 6-1 に尊敬する普及指導員の結果、図 6-2 に回答者本人の結果を示す。図から明らかなように、尊敬する普及指導員と本人のいずれの場合でも「**生産技術の紹介**」「**関係機関との連携調整**」が多かった。それに次いで、「**農業の担い手育成**」「**望ましい産地育成**」が多く、回答者本人においては「**農業者同士の連携**」「**普及員自身の学習**」もそれに匹敵するほど多かった⁴。

⁴ 支援に関して、本文および図においては略称を使用しているものもある。略称を用いた支援の実際の質問票での項目は以下のとおりである。農業の担い手育成：農業の担い手の育成及びその将来にわたる経営確立に向けた取り組みに対する支援、望ましい産地育成：望ましい産地の育成に向けた取り組みに対する支援、環境と調和した農業：環境と調和した農業生産に向けた取り組みに対する支援、食の安全・安心確保：食の安全・安心の確保に向けた取り組みに対する支援、農村地域の振興：農村地域の振興に向けた取り組みに対する支援、販売促進：販売促進に対する支援、農業者同士の連携：農業者同士の連携・組織作りに関する支援、将来のビジョン提示：将来に向けたビジョンの提示、地域の具体的問題指摘：地域の抱えている具体的問題の指摘、普及員自身の学習：普及員自身の知識・技術の獲得

図 5-1. 尊敬する普及指導員が経験した事例で地域の抱えていた問題

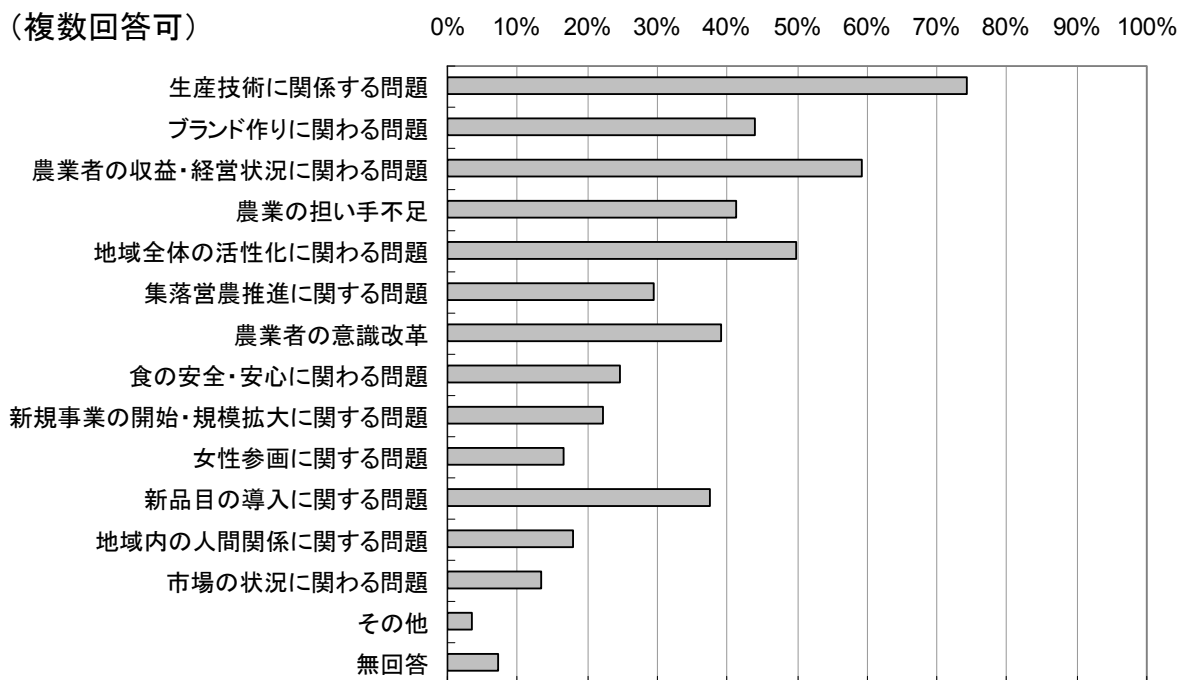


図 5-2. 回答者本人が経験した事例で地域の抱えていた問題

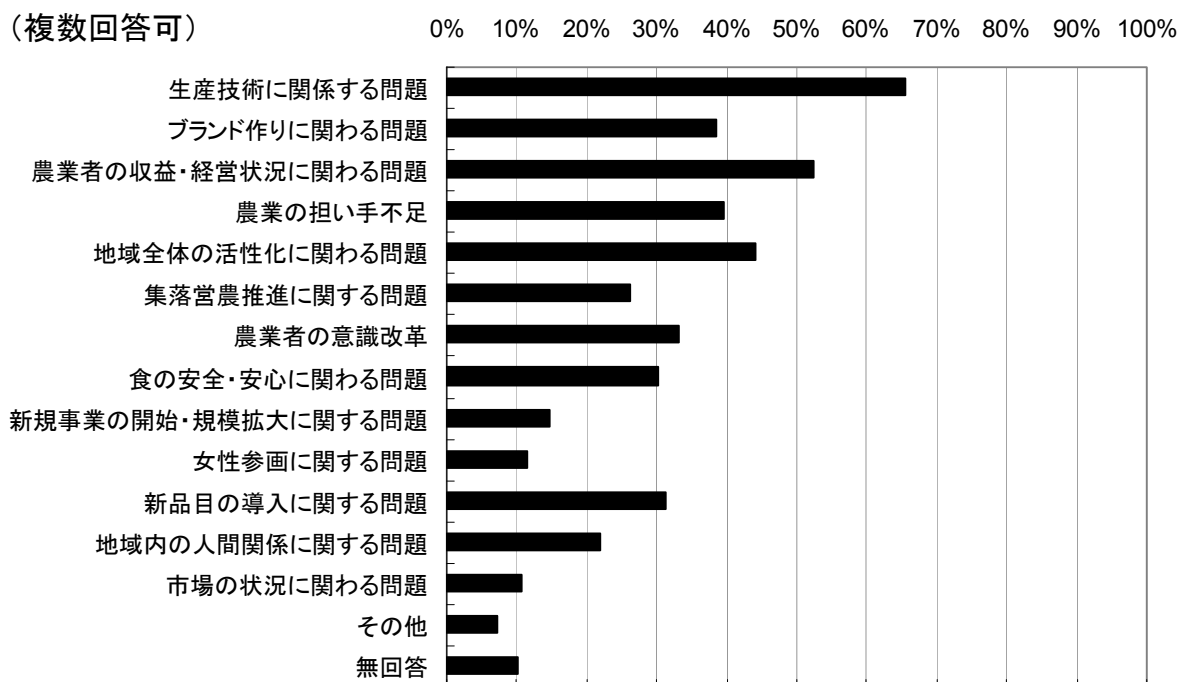


図 6-1. 尊敬する普及指導員が経験した事例で実施した支援

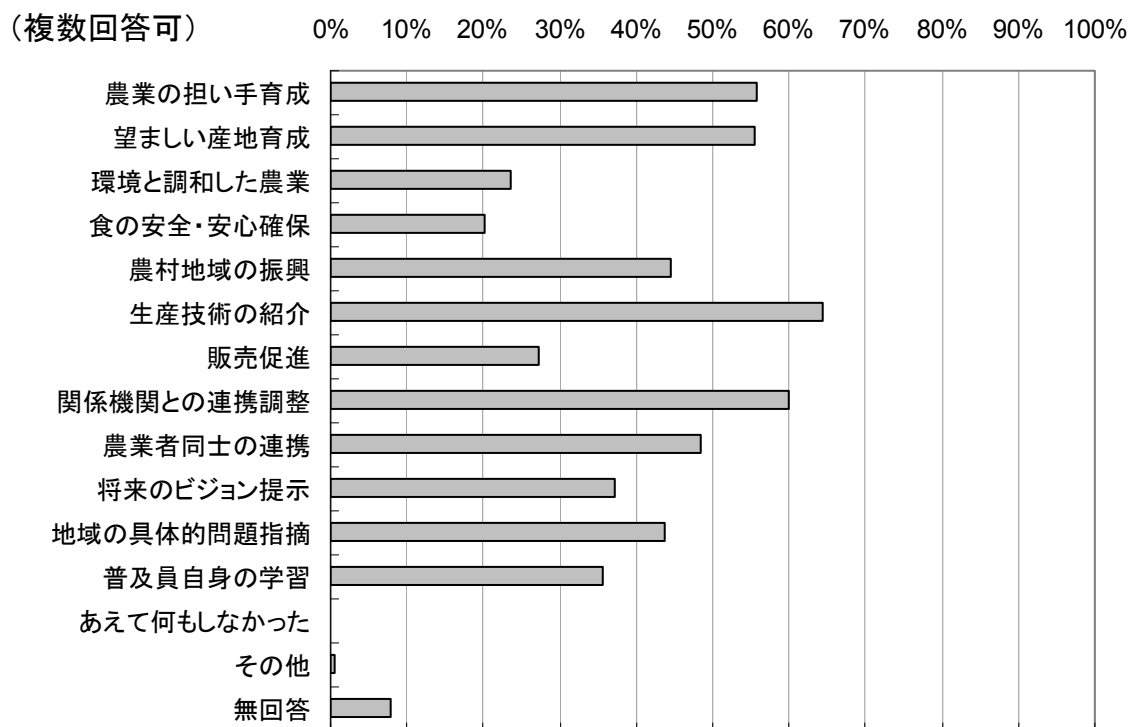
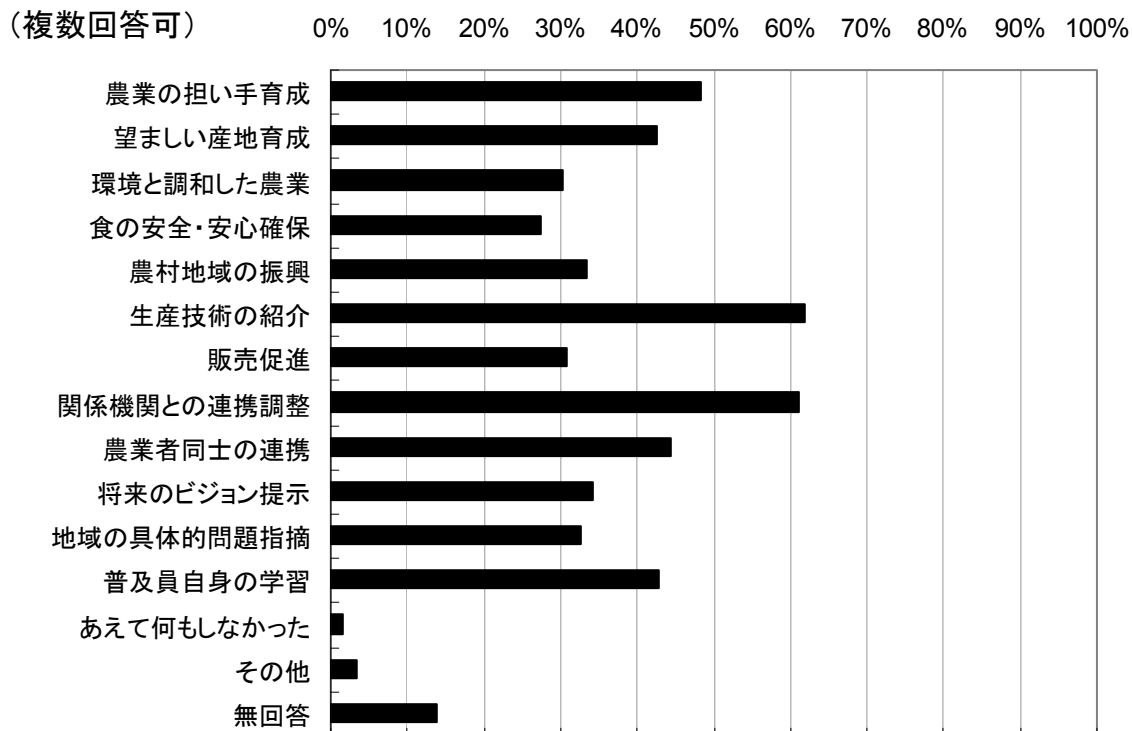


図 6-2. 回答者本人が経験した事例で実施した支援



次に、尊敬する普及指導員の実施した支援と回答者本人の実施した支援を、問題タイプ別に比較した。図 7-1～図 7-13 のそれぞれが、各問題タイプの結果を示している(「その他」の問題はここでは省略する)。各図の縦軸は、各タイプの問題が地域に存在した時に、尊敬する普及指導員が各支援を実施した比率と、回答者本人が各支援を実施した比率を表している。たとえば、図 7-1 では、「生産技術に関する問題」が地域に存在していたと回答された際に、各タイプの支援について、尊敬する普及指導員が実施していたケースの比率と、回答者本人が実施していたケースの比率をそれぞれ算出した。縦軸がその比率を示している。灰色のバーが高ければ高いほど、そのタイプの支援を実施した「尊敬する普及指導員」が多かったことを意味し、黒色のバーが高ければ高いほど、そのタイプの支援を実施した回答者本人が多かったことを意味する。

結果の詳細は各図を参照されたいが、全体を俯瞰した時に見られる特徴をここに述べておきたい。まず、全体を通して、**尊敬される普及指導員の場合でも、回答者本人の場合でも、「生産技術の紹介」「関係機関との連携調整」**が多く実施されており、**普及指導員の主要な活動**になっていることが示されている。ただし、尊敬される普及指導員の場合と回答者本人の場合を比較すると、例外はあるもののほとんどの問題タイプにおいて、**尊敬される普及指導員は、「農業の担い手育成」「望ましい産地育成」「農村地域の振興」「地域の具体的問題指摘」**など、個別の農業者や個別の事態ではなく、**地域全体の育成や振興に関わる普及活動**を実施していることが多かった。

図 7-1. 生産技術に関する問題

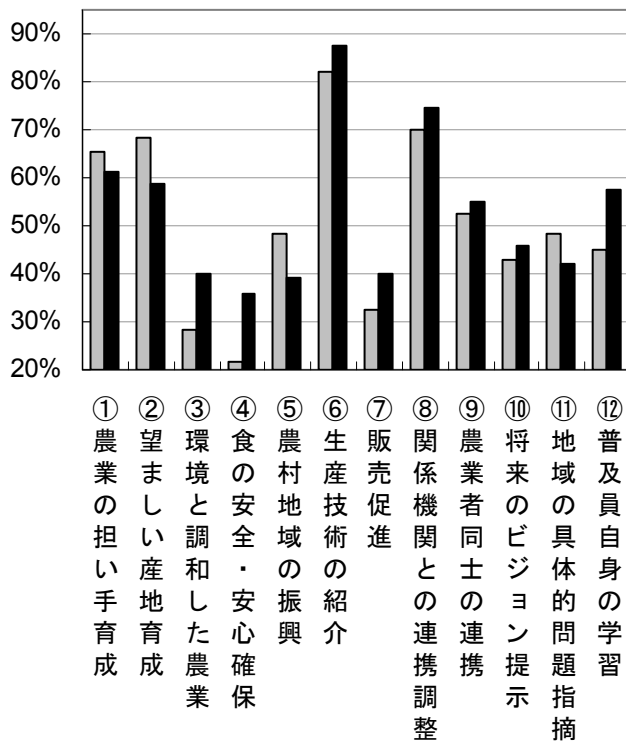


図 7-2. ブランド作りに関わる問題

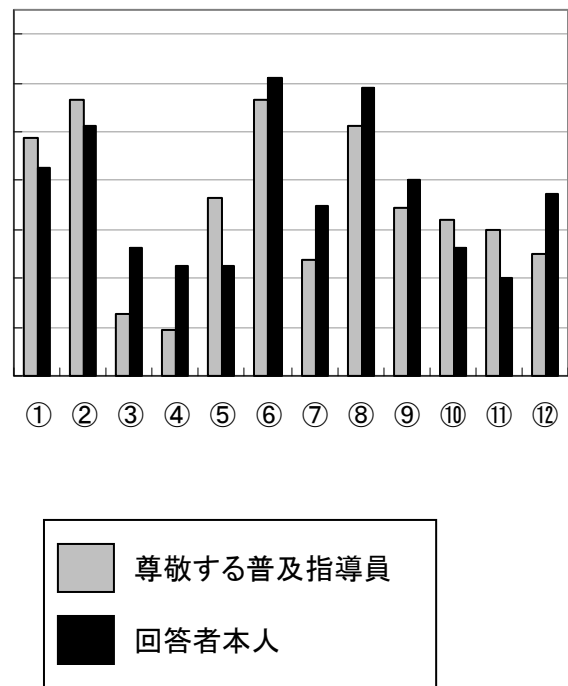


図 7-3. 農業者の収益・経営状況に関わる問題

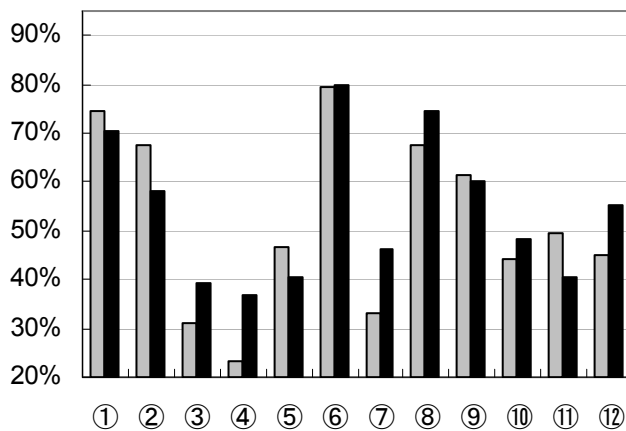


図 7-4. 農業の担い手不足

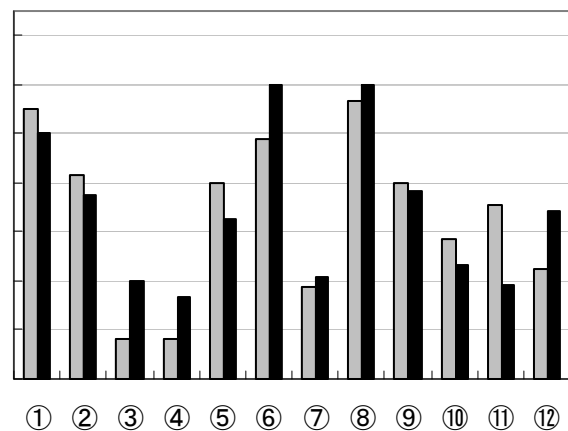


図 7-5. 地域全体の活性化に関わる問題

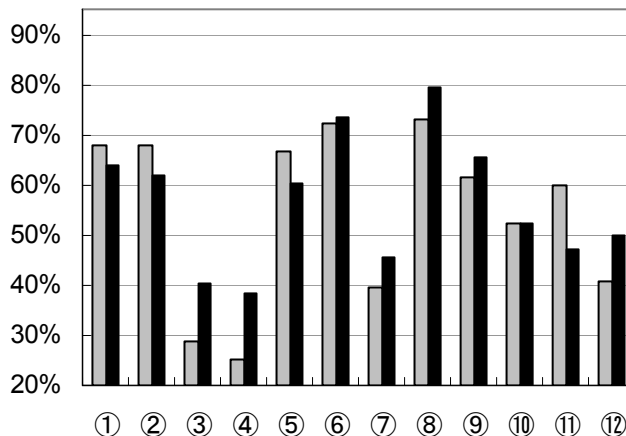


図 7-6. 集落営農推進に関する問題

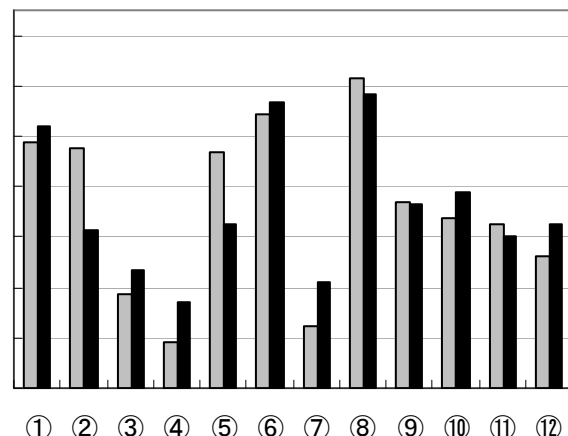


図 7-7. 農業者の意識改革

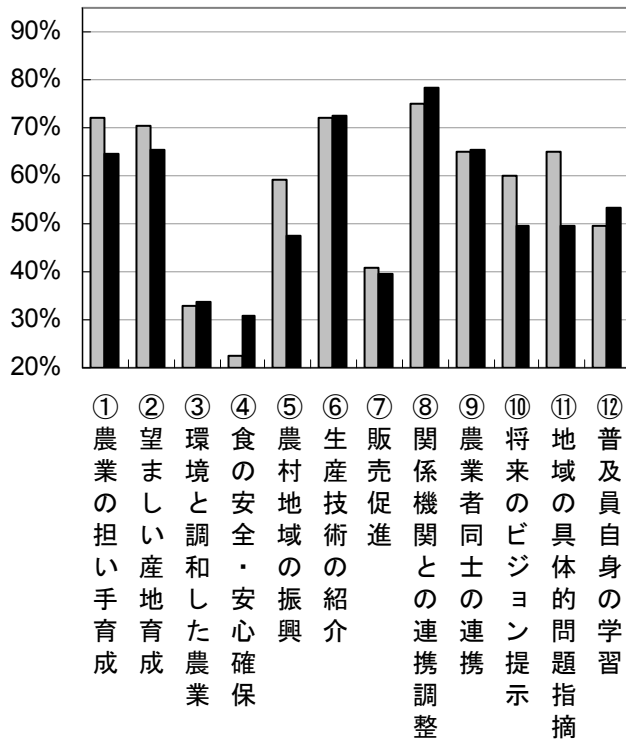


図 7-8. 食の安全・安心に関わる問題

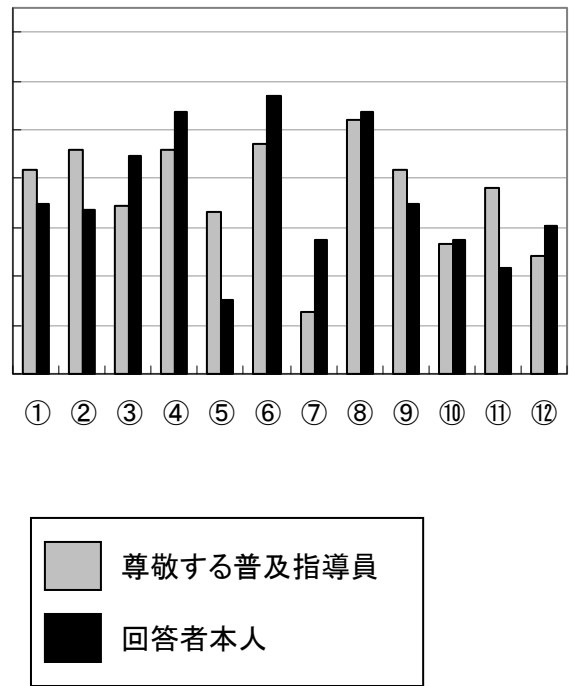


図 7-9. 新規事業の開始・規模拡大に関する問題

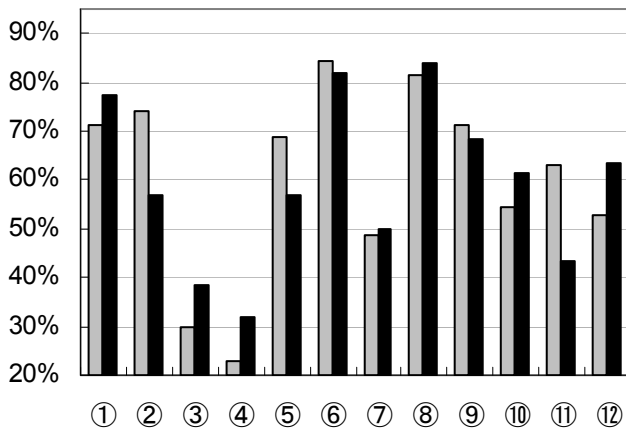


図 7-10. 女性参画に関する問題

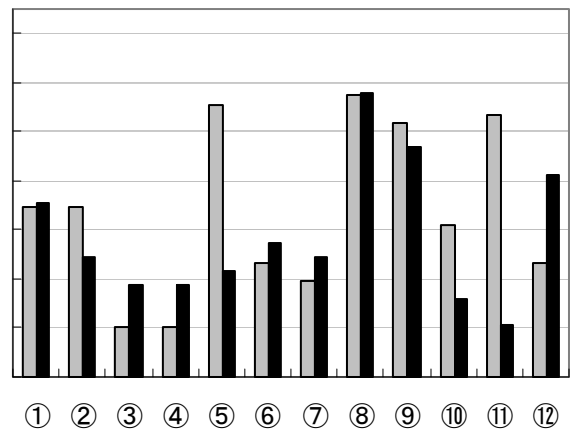


図 7-11. 新品目の導入に関する問題

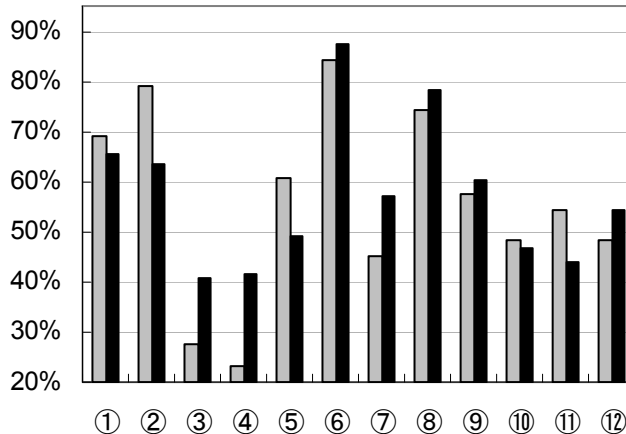


図 7-12. 地域内の人間関係に関する問題

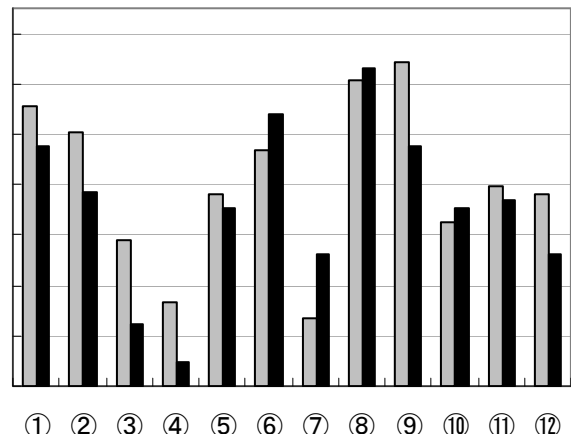
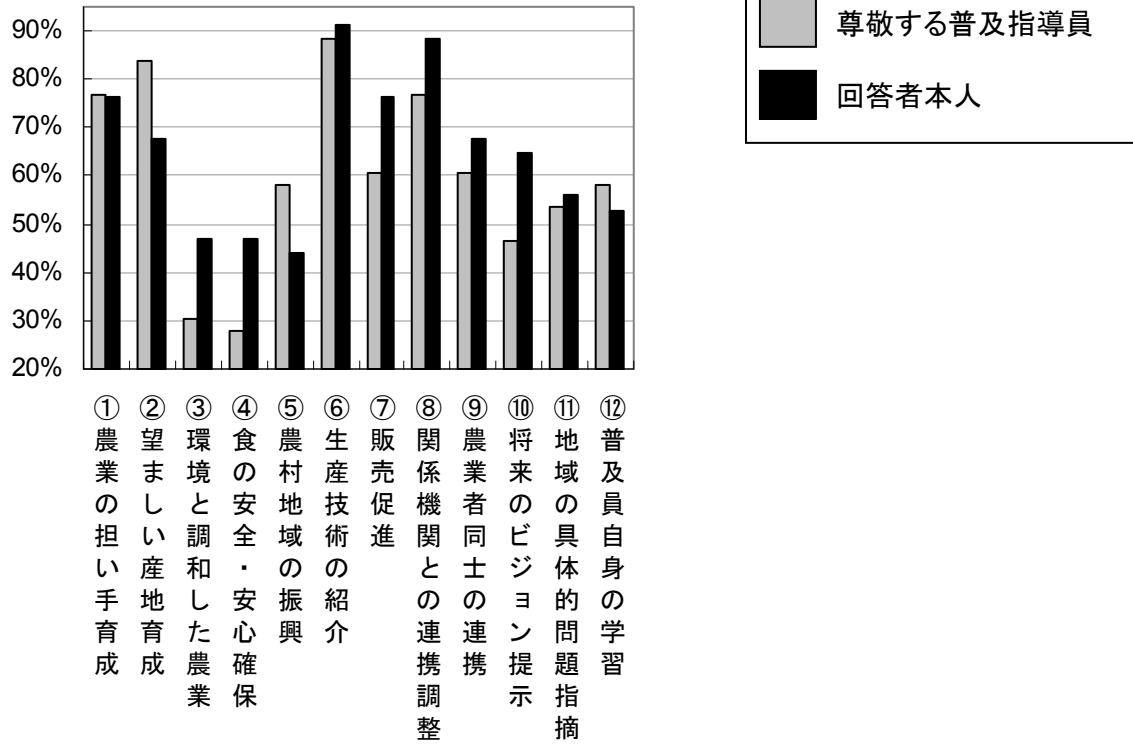


図 7-13. 市場の状況に関わる問題



目的②:問題のタイプと有効な支援の対応を明らかにするための第二のアプローチとして、各支援を実施することが地域住民満足度や状況改善度に与えた効果の大きさを検討した。

方法②:

回答者の実施した各種支援が、実際にどれだけ状況を改善したか、また、普及指導員の働きに地域住民がどれだけ満足したかを問題タイプ別に検討した。

上述のように、回答者本人は過去に経験した状況について、その時に地域の抱えていた問題とその時に回答者本人の実施した支援を回答していた。それに加えて、その時の普及活動を通じて状況がどれだけ改善したか(以下、「状況改善度」)、また、地域住民が回答者本人の働きにどれだけ満足したと思うか(以下、「地域住民満足度」)を尋ねた。具体的には、「全体的に言って、その時のあなたの働きに、地域の人々はどれくらい満足していたと思いますか? 100点満点中何点かでお答えください」という項目(地域住民満足度)と、「その地域に起こった困難な状況は改善したと感じますか?」という項目(状況改善度、0点[全く改善しなかった]~3点[かなり改善した])に回答してもらった。

結果②

各タイプの問題について、ある支援を実施したとする回答者と実施しなかったとする回答者の地域住民満足度と状況改善度を比較することで算出される「効果の大きさ」という統計的指標を算出し、その支援を実施することの有効性を検討した⁵。この「効果の大きさ」が高い数値を持つ支援は、その問題タイプに対して有効な支援であることを意味する。

各タイプの問題について、各支援の「効果の大きさ」を地域住民満足度と状況改善度のそれぞれに関して算出した。図 8-1~図 8-10 は、その結果を示している。

なお、いくつかのタイプの問題は、そのタイプの問題が地域に存在していたとする回答が少なかったため、この分析から除外した。具体的には、「新規事業の開始・規模拡大に関する問題」「女性参画に関する問題」「市場の状況に関わる問題」「その他」は、その問題が地域に存在したと報告している回答者が 50 名未満であったため、分析結果の信頼性が低いと判断し、報告を省略する。また、支援の方でも、「あえて何もしなかった」および「その他」と回答したケースは少なく(5 名と 11 名)、やはり分析結果の信頼性が低いと判断し、報告を省略する。

一般に、「効果の大きさ」は 0.20 で「小さい効果」、0.50 で「中程度の効果」、0.80 以上で「大きい効果」とされている。図 8-1~図 8-10 の縦軸は、各タイプ支援を実施することが地域住民満足度あるいは状況改善度に及ぼす効果の大きさを表しているが、「効果の大

⁵ ここで算出している「効果の大きさ」は、Cohen's d である。各タイプ問題について、その問題が地域に存在していたと回答したケースを対象に、各支援を実施したか/しなかったかを独立変数、地域住民満足度あるいは状況改善度を従属変数とする t 検定を実施し、各独立変数(各支援の実施 vs. 非実施)の効果量 d を算出した。

きさ」が 0.50 以上のバーは黒色にして強調している。以下、効果の大きいもの、すなわち、黒色のバーに注目して分析結果を述べる。

まず全体を通して見ると、多くの問題タイプに対して「**関係機関との連携調整**」が効果を持っていた。この支援は、特に地域住民満足度に対して効果を持ちやすかった。また、安定して多くの問題タイプに効果を持つものに「**農業者同士の連携**」「**将来のビジョン提示**」が挙げられ、これらは状況改善度に効果を持ちやすいことが示された。

以下、個別の課題に対しての結果を述べる。「生産技術に関係する問題」に対しては、どの支援もあまり強い効果を持ってはいなかった(図 8-1)。ただし、「将来のビジョン提示」が地域住民満足度に効果を持ち、「農業者同士の連携」が状況改善度に効果を持っていた。ところが、このタイプの問題に直接的に対処しようとしているはずの「生産技術の紹介」は、地域住民満足度にも状況改善度にもあまり効果を持っていなかった。

次に、「ブランド作りに関わる問題」について見る(図 8-2)。ここでは、地域住民満足度に対して、「関係機関との連携調整」、次いで「将来のビジョン提示」が効果を持っていた。状況改善度に対しては、やはり「将来のビジョン提示」が強い効果を持ち、次いで「農業の担い手育成」「関係機関との連携調整」「農業者同士の連携」「地域の具体的問題指摘」が効果を持っていた。

「農業者の収益・経営状況に関わる問題」に対しては(図 8-3)、地域住民満足度に「関係機関との連携調整」が最も強い効果を持ち、次いで「農業者同士の連携」が効果を持っていた。状況改善度には、「将来のビジョン提示」が最も強い効果を持ち、やはり「農業者同士の連携」がそれと変わらないほどの効果を持っていた。

「農業の担い手不足」に対しては多くの支援が効果を持っていた(図 8-4)。まず、地域住民満足度に最も強い効果を持っていたのは「関係機関との連携調整」で、他に「将来のビジョン提示」「農村地域の振興」「地域の具体的問題指摘」「農業者同士の連携」が効果を持っていた。状況改善度に対しては、「将来のビジョン提示」「地域の具体的問題指摘」が強い効果を持ち、それに次いで、「関係機関との連携調整」「農業者同士の連携」「農村地域の振興」「生産技術の紹介」が効果を持っていた。ところが、このタイプの問題に直接的対処であるはずの「農業の担い手育成」の効果は、必ずしも強くなかった。

「地域全体の活性化に関わる問題」に関しては(図 8-5)、「関係機関との連携調整」だけが地域住民満足度に効果を持っていた。一方、状況改善度に対しては、やはり「関係機関との連携調整」が最も強い効果を持ち、次いで「農業者同士の連携」「将来のビジョン提示」「生産技術の紹介」に効果があった。

「集落営農推進に関する問題」に対しては(図 8-6)、「将来のビジョン提示」「農業者同士の連携」「関係機関との連携調整」「農業の担い手育成」の順に効果が見られた。状況改善度に対しては、「生産技術の紹介」に強い効果が見られ、他に「地域の具体的問題指摘」「農業者同士の連携」「将来のビジョン提示」、そして「農業の担い手育成」に効果が見られ

た。

「農業者の意識改革」については、多くの支援が効果を持っていた(図 8-7)。地域住民満足度に対しては、「関係機関との連携調整」「農村地域の振興」「生産技術の紹介」の順に効果が見られた。状況改善度に対しては、やはり「関係機関との連携調整」に最も強い効果が見られ、次いで「地域の具体的問題指摘」に効果が見られた。その他に、「生産技術の紹介」「農村地域の振興」「農業者同士の連携」「将来のビジョン提示」「望ましい産地育成」「販売促進」に効果が見られた。

「食の安全・安心に関わる問題」については(図 8-8)、「関係機関との連携調整」が地域住民満足度に強い効果を持ち、次いで「将来のビジョン提示」に効果が見られた。他に「地域の具体的問題指摘」「農村地域の振興」にも効果が見られた。状況改善度に対しては、「農業の担い手育成」「将来のビジョン提示」「農村地域の振興」に効果が見られた。

「新品目の導入に関する問題」について見ると(図 8-9)、地域住民満足度に「農業者同士の連携」「将来のビジョン提示」「農村地域の振興」が効果を持ち、「関係機関との連携調整」も効果を持っていた。状況改善度に対しては、「農業者同士の連携」と「将来のビジョン提示」が強い効果を持っていた。この他に、「地域の具体的問題指摘」と「農村地域の振興」も効果を持っていた。

最後の「地域内の人間関係に関する問題」については(図 8-10)、地域住民満足度に対して「関係機関との連携調整」が効果を持っていた。状況改善度に対しては、「農業の担い手育成」「環境と調和した農業」が強い効果を持ち、「関係機関との連携調整」も効果を持っていた。他に、「食の安全・安心確保」「望ましい産地育成」「農業者同士の連携」も効果を持っていた。

図 8-1. 生産技術に関する問題

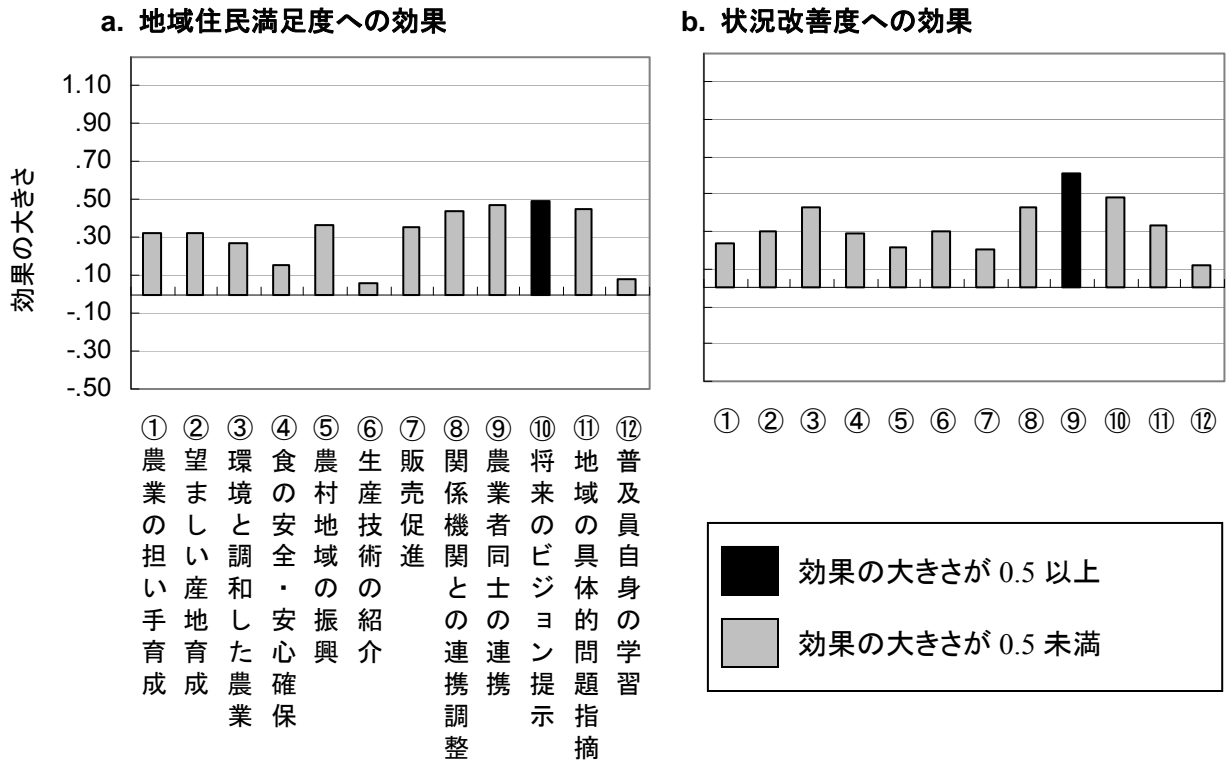


図 8-2. ブランド作りに関わる問題

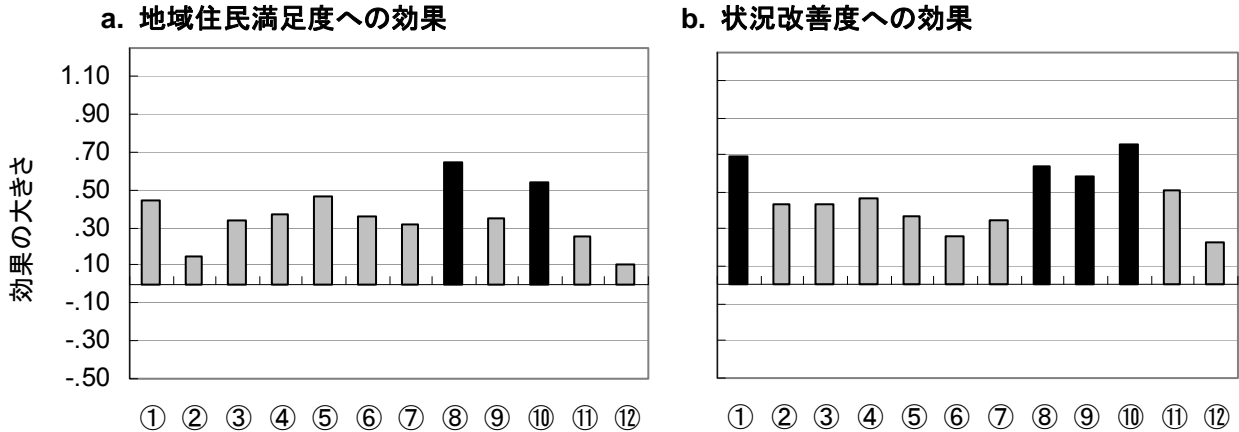


図 8-3. 農業者の収益・経営状況に関わる問題

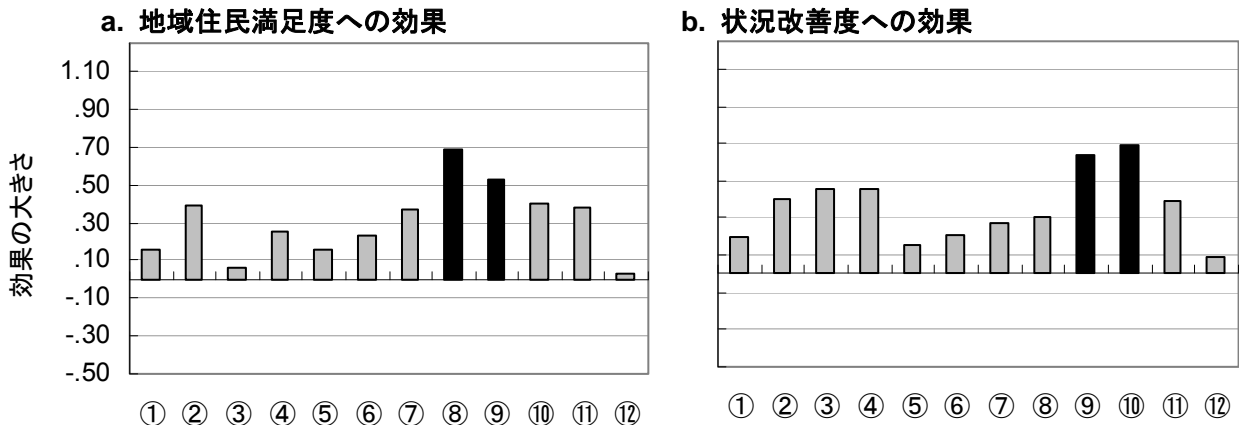


図 8-4. 農業の担い手不足

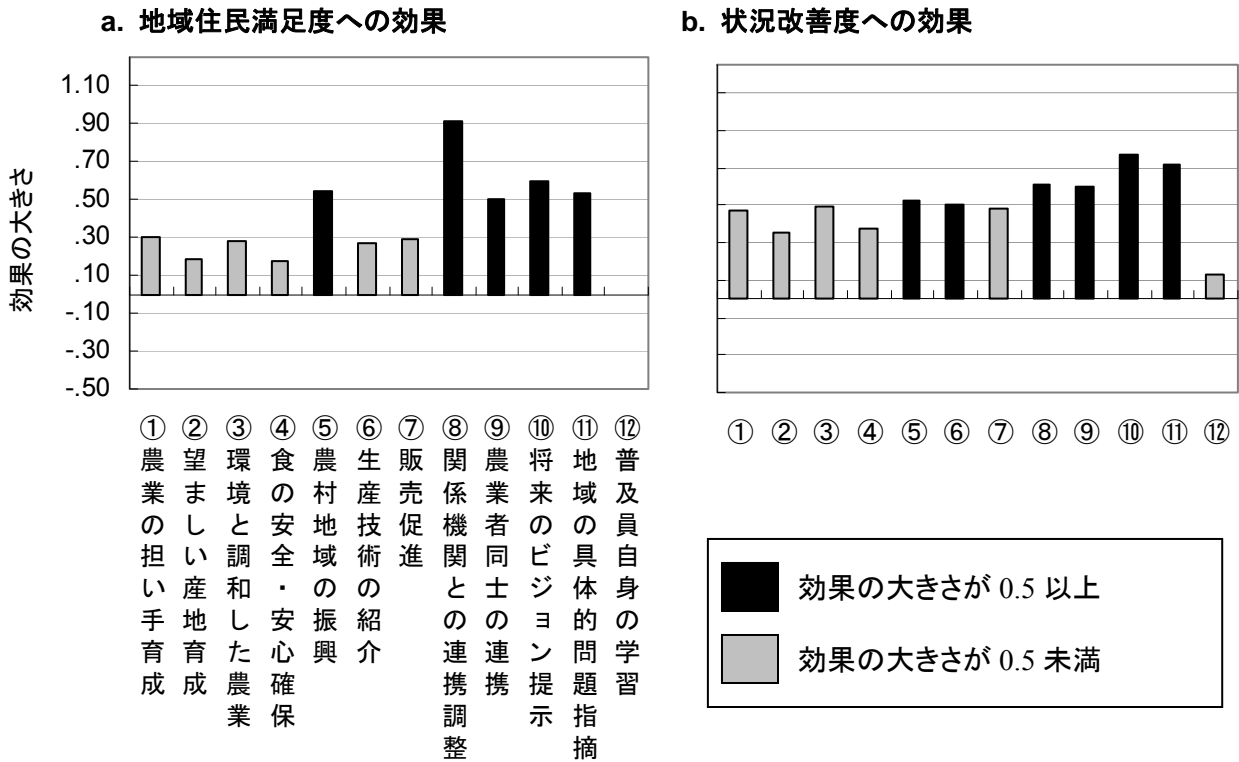


図 8-5. 地域全体の活性化に関わる問題

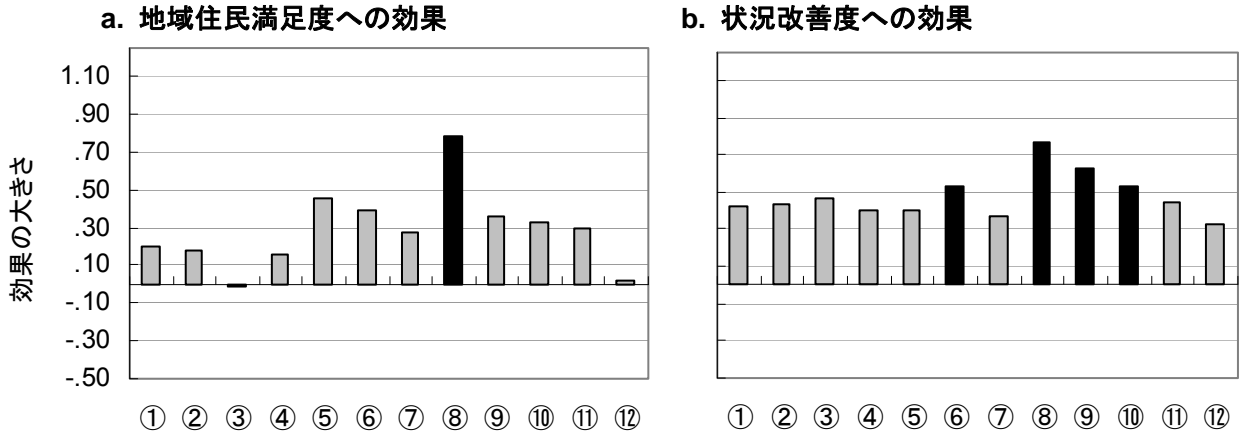


図 8-6. 集落営農推進に関する問題

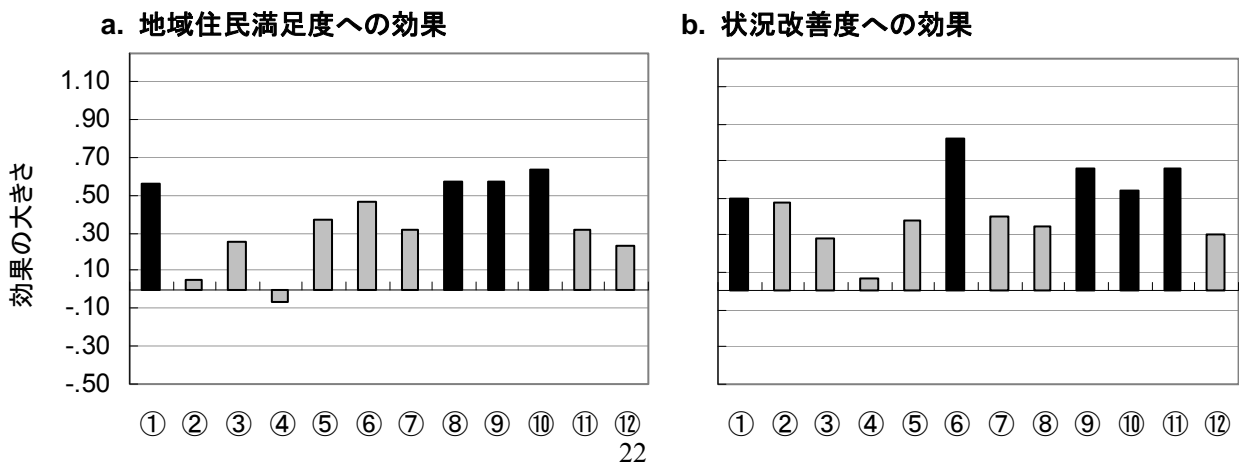


図 8-7. 農業者の意識改革

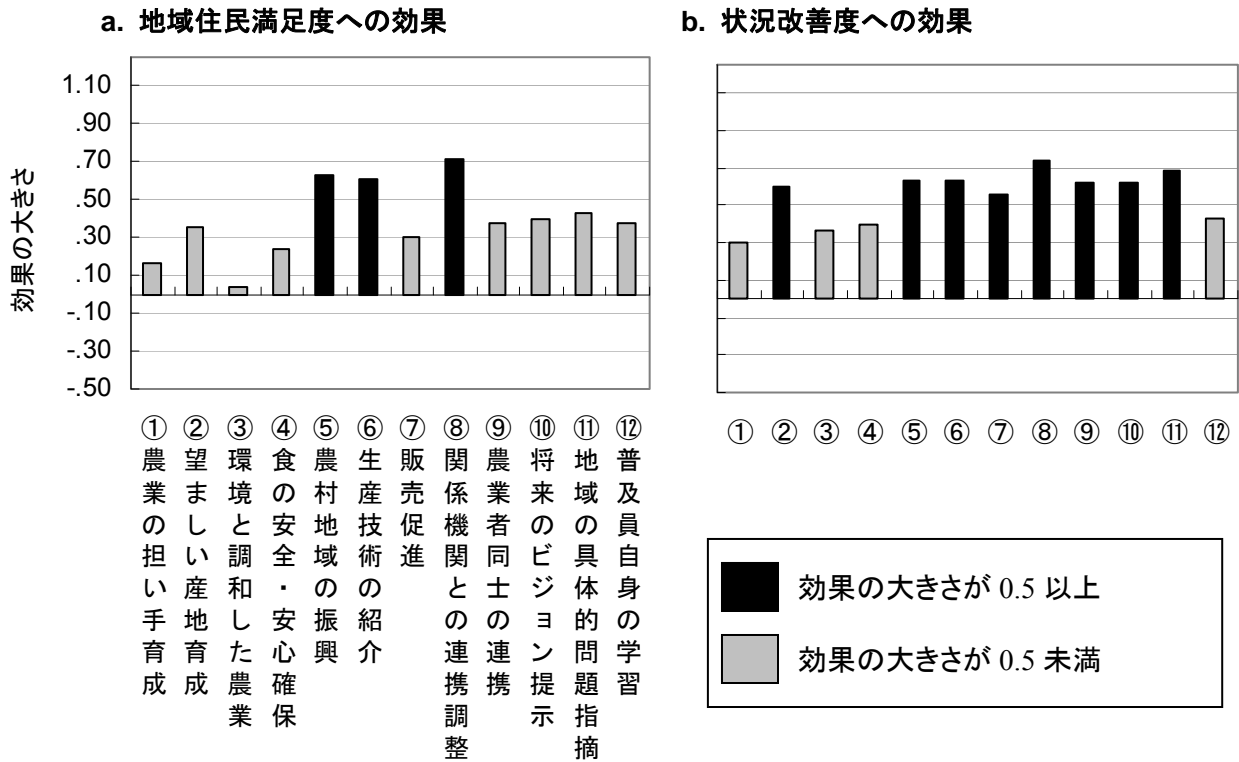


図 8-8. 食の安全・安心に関わる問題

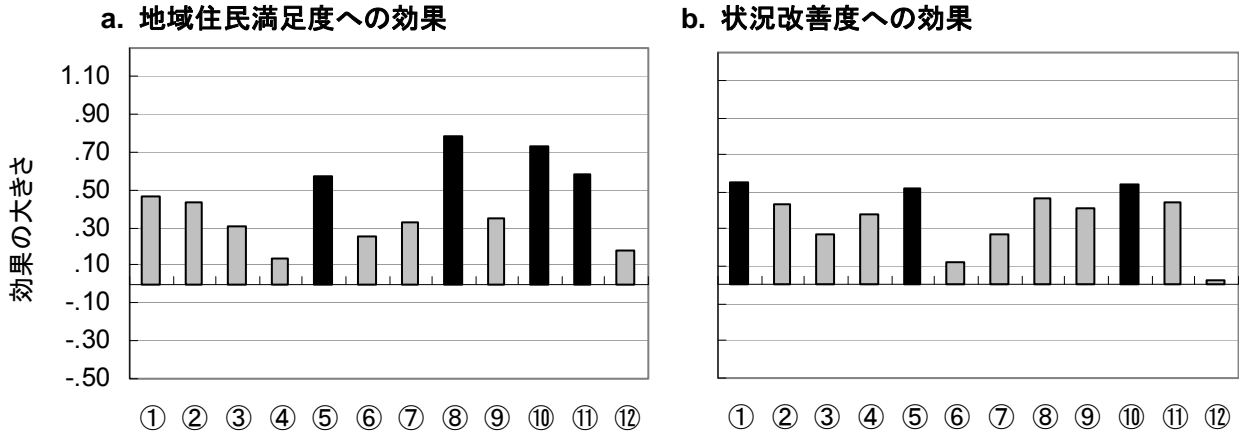


図 8-9. 新品目の導入に関する問題

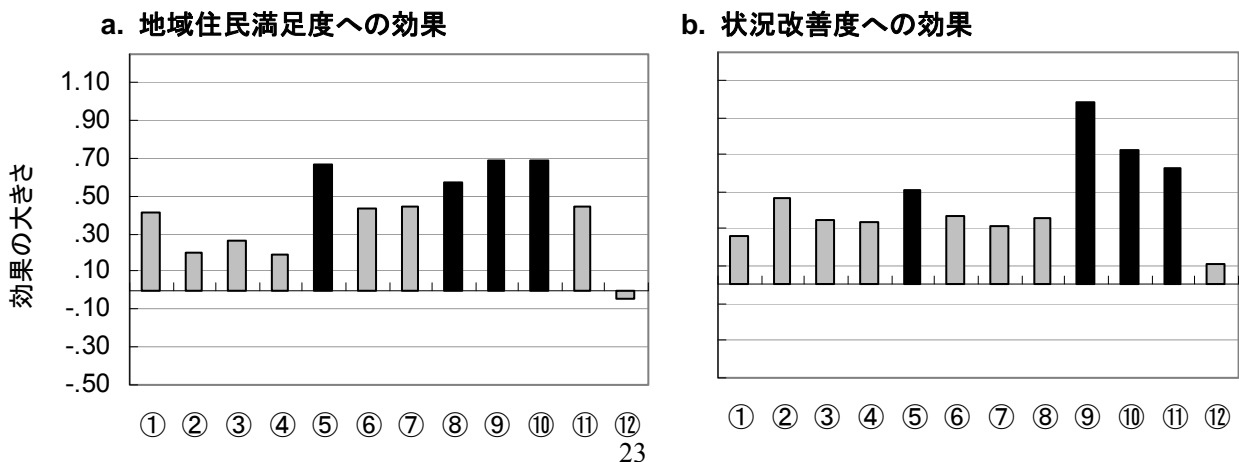
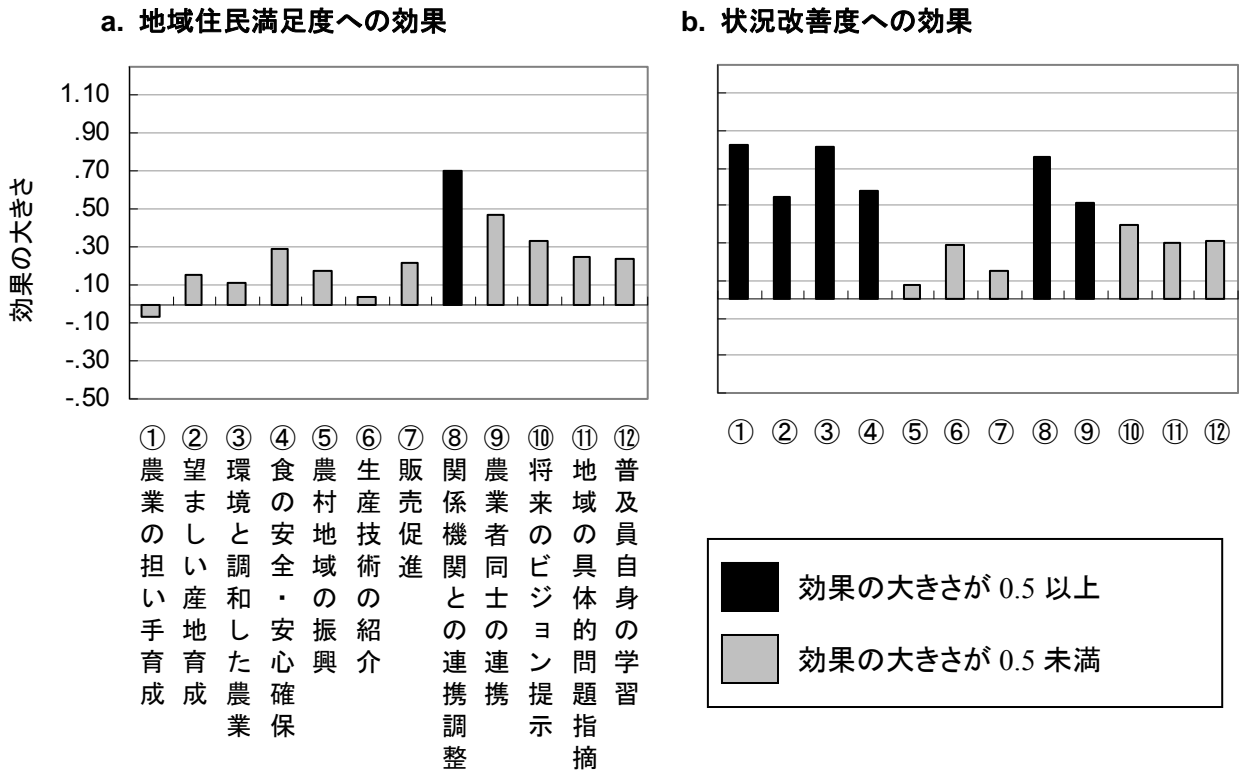


図 8-10. 地域内の人間関係に関する問題



6. 地域の抱える問題のタイプと普及指導員の必要とするサポート

「地域のリーダー」からのサポートが最も効果を持ちやすく、次いで「普及指導員」からのサポートが効果を持ちやすかった。

目的:地域の抱える問題のタイプが異なれば、担当の普及指導員が誰からのサポートを必要とするか、誰からのサポートが有効に働くかも異なってくると考えられる。本調査の第三の目的は、**地域の抱える問題のタイプごとに、誰からのサポートが普及指導員を助ける上で有効であるかを明らかにすること**にあった。

方法:回答者の直面した事例の中で、地域の抱えていた問題のタイプを尋ねるとともに、そこで誰からサポートを受けたかを尋ね、それぞれのサポートが地域住民満足度および状況改善度に与えた「効果の大きさ」を検討した。

回答者本人の直面した事例でどのような問題が地域に見られたかは、すでに図 5-2 で示したとおりである。本調査では、回答者本人が直面した事例で、誰かに「助けられた」と感じたことがあったかどうか、また、あったとすればそれが誰であったかを尋ねた(複数回答可)。

結果:ほとんどの人が「助けられたことがある」と回答しており、普及活動上何らかのサポートを受けていた(96.3%)。サポートをくれた人の中で図 9 のとおり、最も多かったのは普及指導員(直属の上司、同僚・先輩普及指導員、専門技術員)で、農業者や地域のリーダーがそれに続いた⁶。

次に、問題のタイプごとに、各人物から「助けられた」と感じた場合とそうでなかった場合を比較し、地域住民満足度と状況改善度に対する「効果の大きさ」を算出した⁷。図 10-1～図 10-10 は、その結果を示している。なお、「新規事業の開始・規模拡大に関する問題」「女性参画に関する問題」「市場の状況に関わる問題」「その他」は、その問題が地域に存在したと報告している回答者が 50 名未満であったため、分析結果の信頼性が低いと判断し、報告を省略する。また、普及指導員へのサポートの方でも、「自分の家族や友人」「助けられたと感じたことはなかった」「その他」を選択したケースは少なく(順に、27 名、18 名、10 名)、やはり分析結果の信頼性が低いと判断し、報告を省略する。

また、「効果の大きさ」が 0.50 以上のバーは黒色にして強調している。以下、効果の大き

⁶ 実際の調査では、援助してくれた人の選択肢として「同僚・先輩普及指導員」「専門技術員」「直属の上司」がもうけられていた。しかし、「先輩普及指導員」と「専門技術員」は「直属の上司」に集約されてしまった可能性がある。そのため、本セクションではこれらの回答を集約し、「普及指導員」というカテゴリーとして報告する。

⁷ ここで算出している「効果の大きさ」は、Cohen's d である。各タイプ問題について、その問題が地域に存在していたと回答したケースを対象に、各人物から「助けられた」と感じたか否かを独立変数、地域住民満足度あるいは状況改善度を従属変数とする t 検定を実施し、各独立変数(各人物からのサポートの有無)の効果量 d を算出した。

いもの、すなわち、黒色のバーに注目して分析結果を述べるが、全体を通して強い効果を持つものが多くは見られなかった。このことは、担当の普及指導員自身が実施した支援と比較して、普及指導員の受けるサポートが地域住民満足度や地域の状況改善度に与える影響が間接的なものになることが原因のひとつと考えられる。そこで、0.50以上の効果を持つものがない場合には、その中で比較的効果の強いものに焦点を当てていく。

まず、全体を通して見ると次のことが指摘できる。まず、「**地域のリーダー**」と「**普及指導員**」からのサポートが、他の人物からのサポートよりも効果を持ちやすいことが示された。特に、「**地域のリーダー**」からのサポートは効果が強く、その効果は地域住民満足度よりも状況改善度で顕著であった。

次に個別の問題について概略を述べる。「生産技術に関係する問題」に対しては、強い効果が見られなかった(図 10-1)。その中で見れば、地域住民満足度・状況改善度のいずれに対しても「地域のリーダー」からのサポートが最も強い効果を持っていた。

「ブランド作りに関わる問題」についても、特に強い効果は見られなかった(図 10-2)。その中で見れば、地域住民満足度には「普及指導員」からのサポートが最も強い効果を持ち、状況改善度には「地域のリーダー」からのサポートが最も強い効果を持っていた。

「農業者の収益・経営状況に関わる問題」でも同じパターンが得られた(図 10-3)。まず、地域住民満足度に対しては「普及指導員」からのサポートが強い効果を持っていた。状況改善度に対しては、特に強い効果を持つものはなかったが、その中では「地域のリーダー」からのサポートが最も強い効果を持っていた。

「農業の担い手不足」でも特別に強い効果は見られなかったが、異なるパターンが得られた(図 10-4)。地域住民満足度に最も強い効果を持っていたのは「JA」からのサポートであった。ただし、状況改善度に対しては、やはり「地域のリーダー」からのサポートが最も強い効果を持っていた。

「地域全体の活性化に関わる問題」では強い効果を持つものがあつた(図 10-5)。ただし、地域住民満足度ではやはり強い効果はなく、「地域のリーダー」がその中で最も強い効果を持っていた。一方、状況改善度に対しては、「地域のリーダー」「JA」「役所の職員」が効果を持っていた。

「集落営農推進に関する問題」では、やはり地域住民満足度にはあまり効果がなく、その中では「地域のリーダー」が最も強い効果を持っていた(図 10-6)。一方、状況改善度では、やはり「地域のリーダー」が強い効果を持つとともに、「普及指導員」からのサポートも強い効果を持っていた。

「農業者の意識改革」では、地域住民満足度に対しても、状況改善度に対しても、「地域のリーダー」が強い効果を持っていた(図 10-7)。

「食の安全・安心に関わる問題」では、地域住民満足度に対してはいずれも強い効果を持たなかったが(図 10-8)、その中では「普及指導員」が最も強い効果を持っていた。一方、状況改善度に対しては、同じ「普及指導員」からのサポートが強い効果を持っていた。

「新品目の導入に関する問題」では、「農業者の意識改革」と似たパターンの結果が得られた(図 10-9)。すなわち、地域住民満足度に対しても、状況改善度に対しても、「地域のリーダー」が強い効果を持っていた。

最後に、「地域内の人間関係に関する問題」では(図 10-10)、地域住民満足度に強い効果を持つものは見られなかったが、「地域のリーダー」からの効果が最も強かった。状況改善度に対しては、「JA」が効果を持っていた。

図 9. 回答者本人が経験した事例で「助けられた」と感じた相手

(複数回答可)

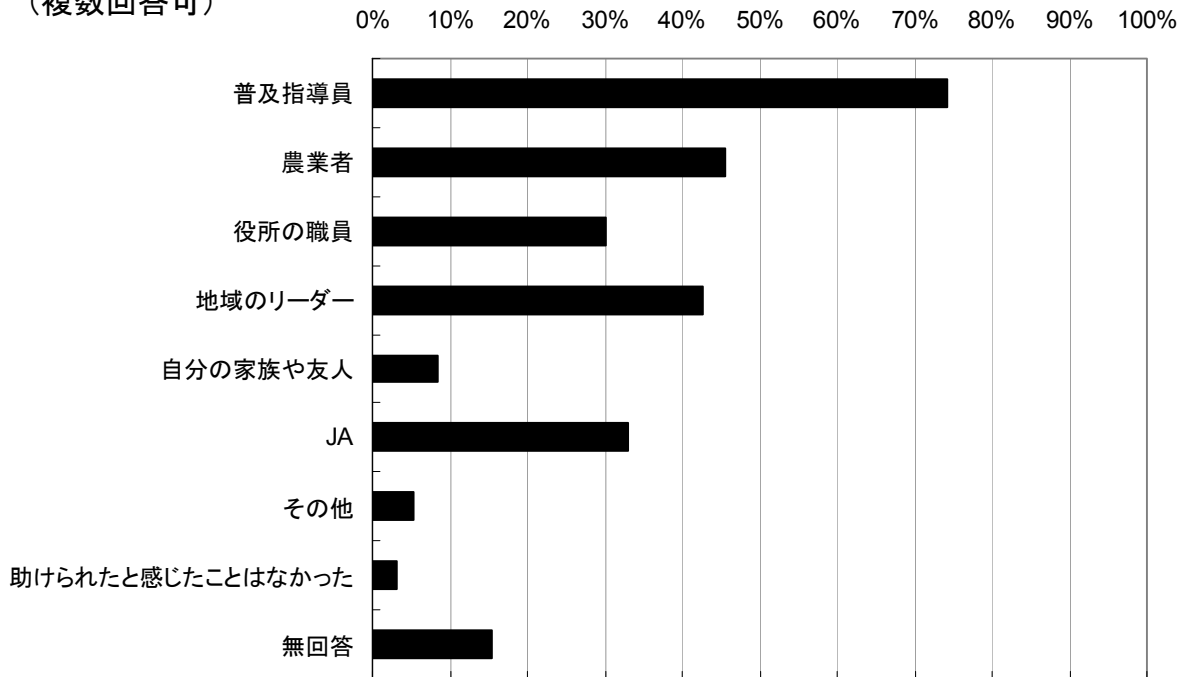


図 10-1. 生産技術に関する問題

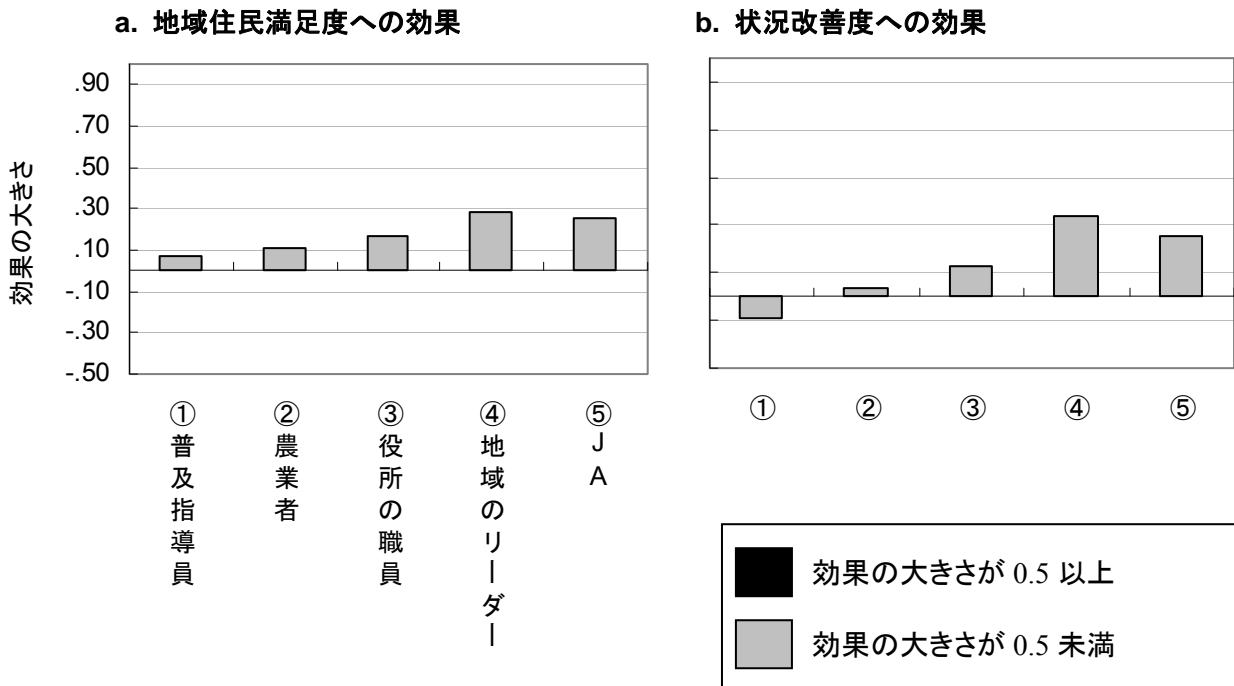


図 10-2. ブランド作りに関わる問題

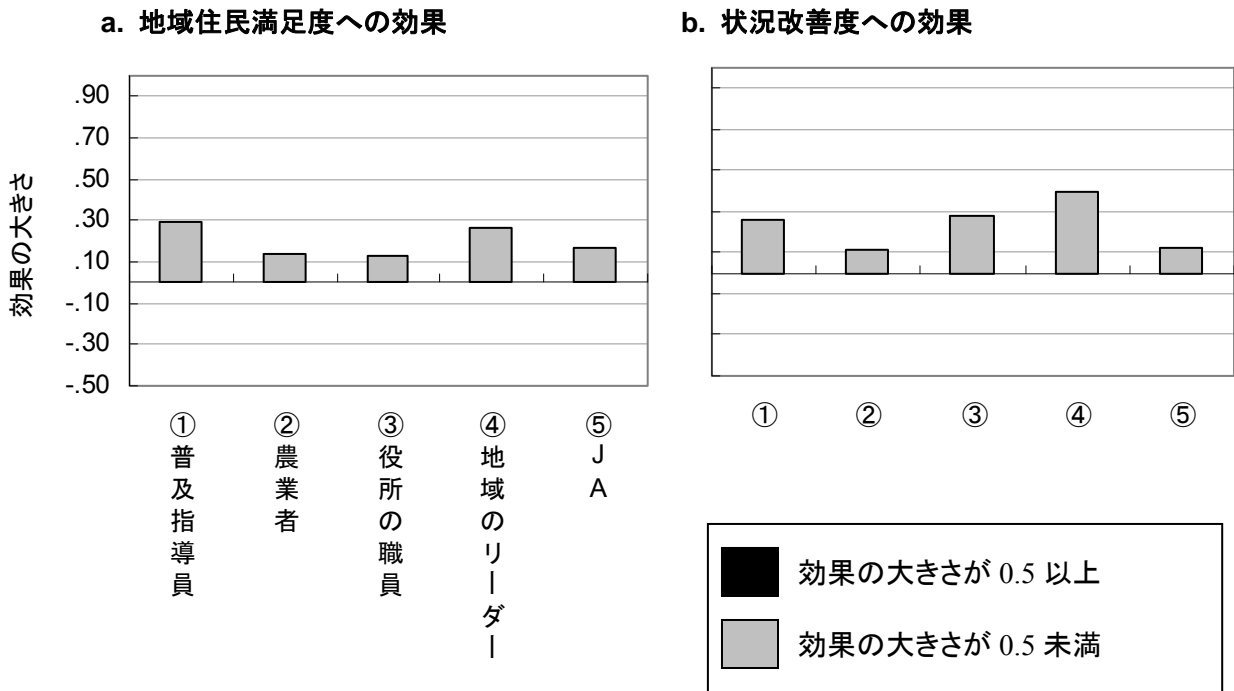


図 10-3. 農業者の収益・経営状況に関わる問題

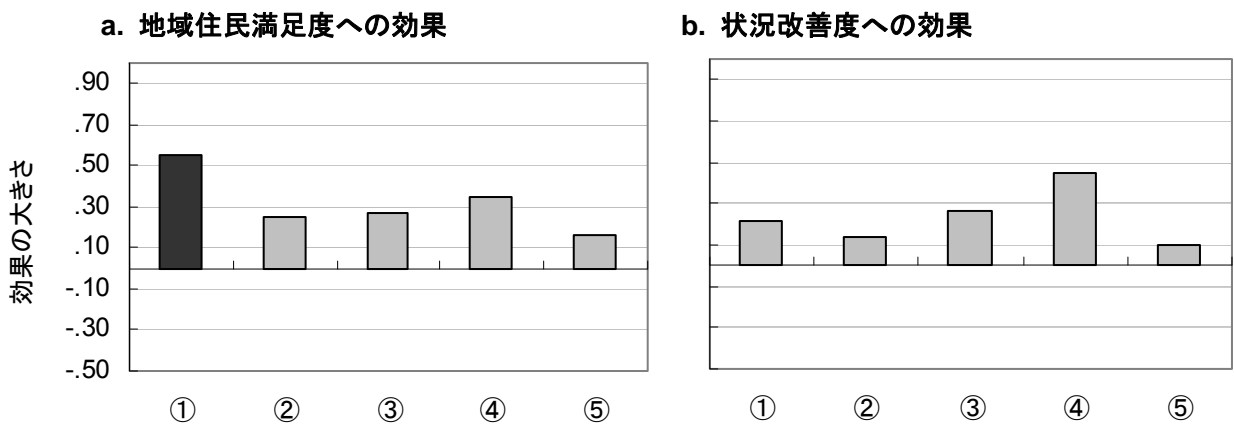


図 10-4. 農業の担い手不足

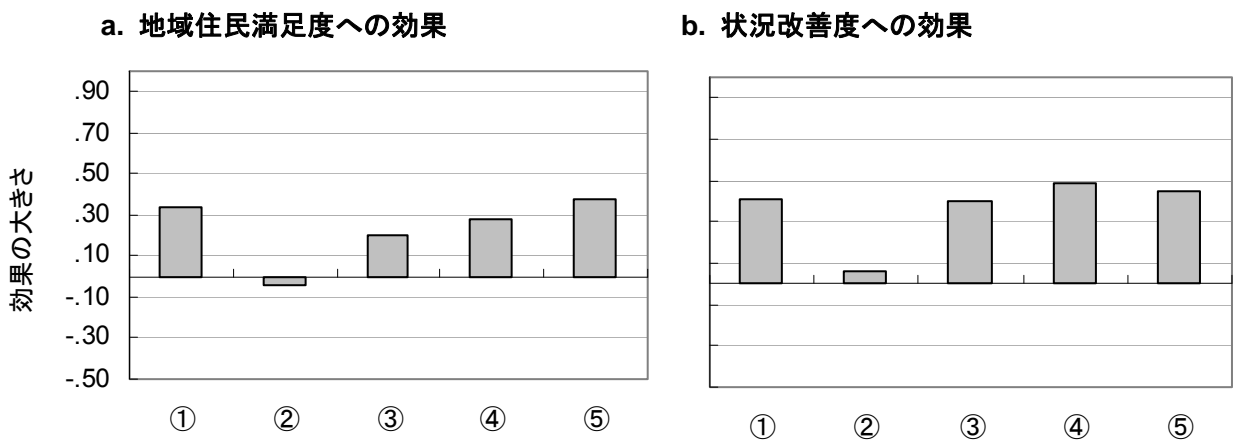


図 10-5. 地域全体の活性化に関わる問題

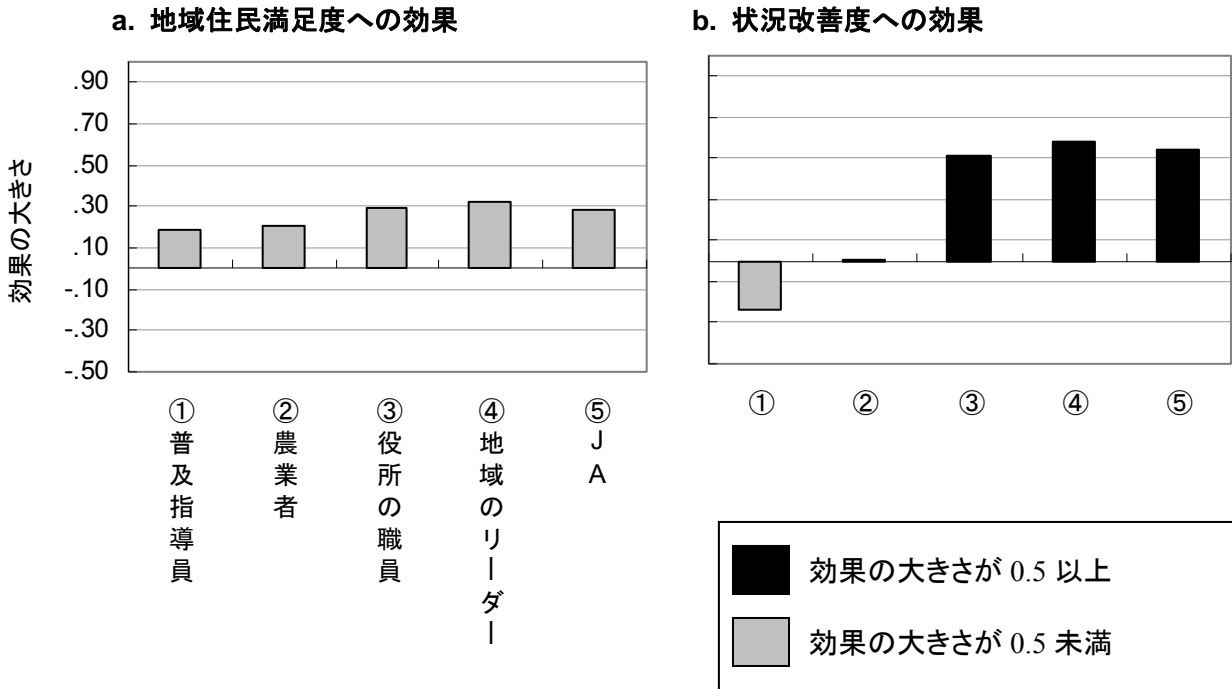


図 10-6. 集落営農推進に関する問題

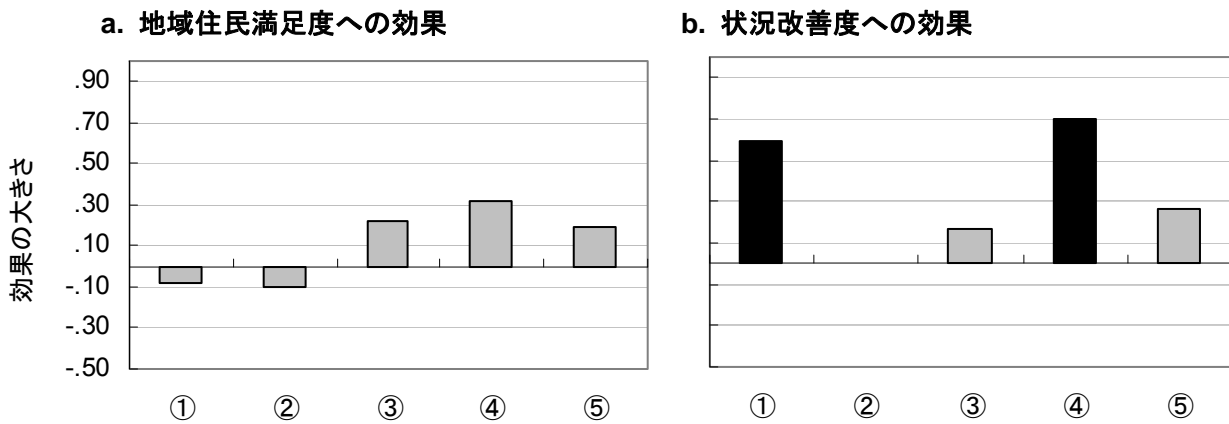


図 10-7. 農業者の意識改革

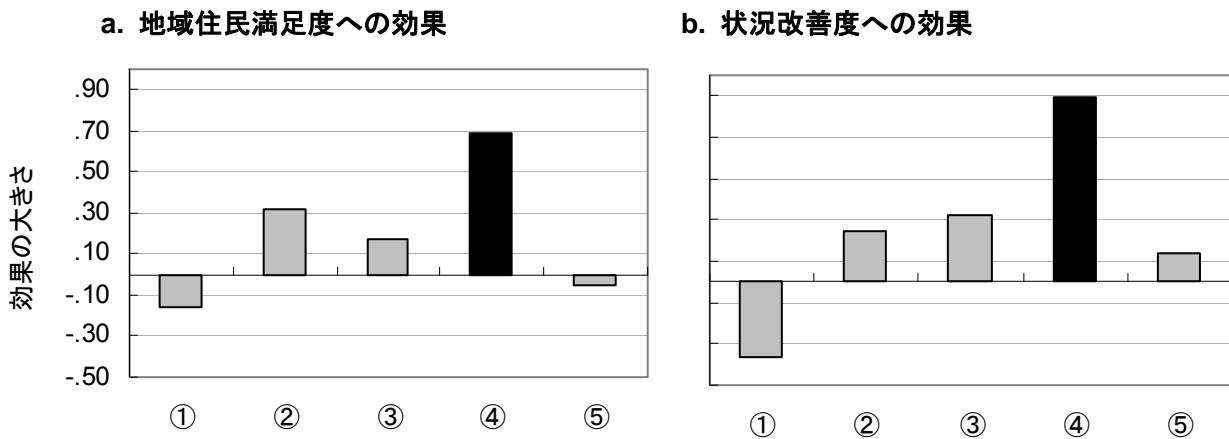


図 10-8. 食の安全・安心に関わる問題

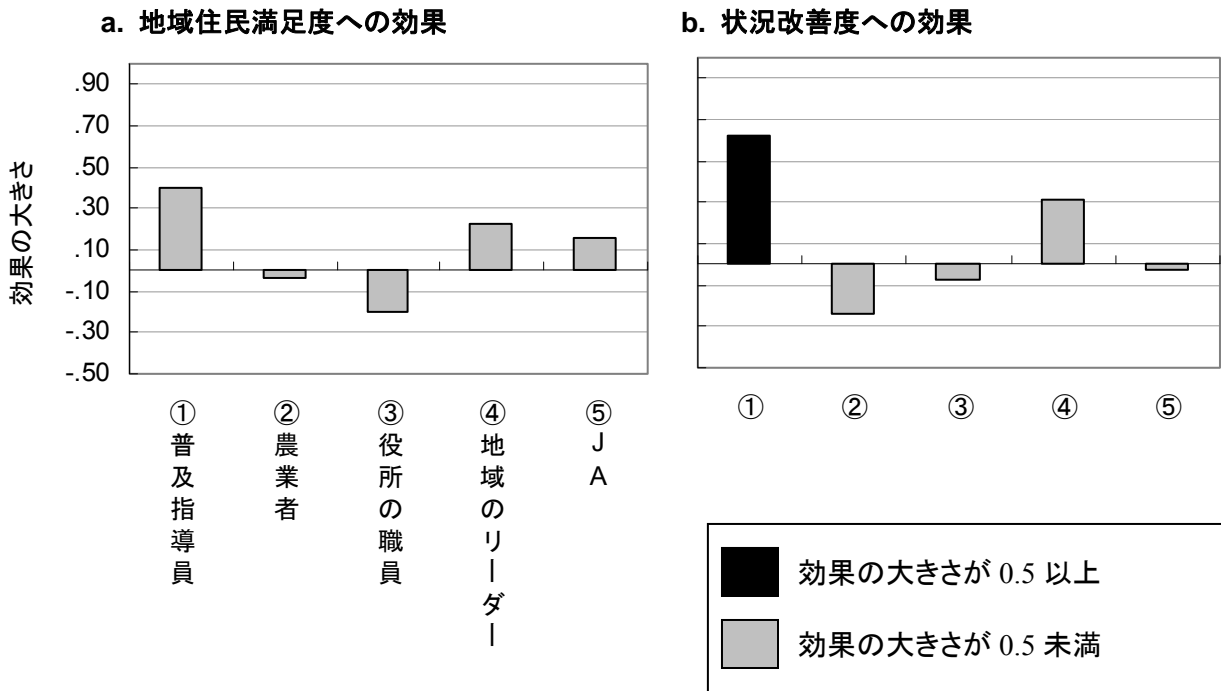


図 10-9. 新品目の導入に関する問題

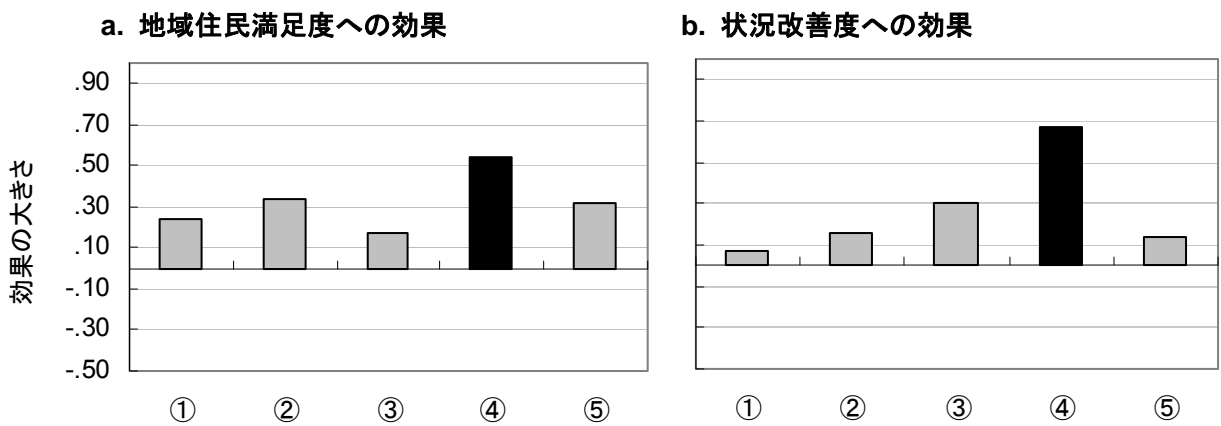
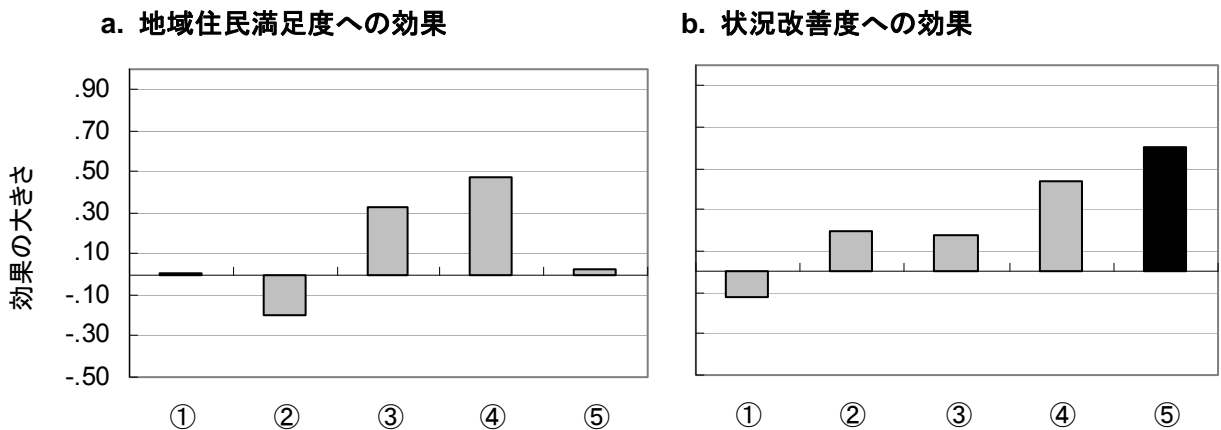


図 10-10. 地域内の人間関係に関する問題



7. 普及活動の必要性

普及活動は地域の状況を改善する上で役立ち、また、地域住民に求められている。

目的:普及活動が農業者や地域に及ぼしているポジティブな影響や、普及指導員が地域からどれだけ必要とされているかについて、普及指導員自身の認識を明らかにすることを試みた。

方法:

状況改善度:回答者本人が過去に経験した状況での普及活動について、「その地域に起こった困難な状況は改善したと感じますか?」という項目に「全く改善しなかった」(0点)、「あまり改善しなかった」(1点)、「少しだけ改善した」(2点)、「かなり改善した」(3点)で回答してもらった。

地域住民のニーズ:「この状況であなたはどのくらい地域の人たちに必要とされていたと感じますか?」という項目に「全く必要とされず」(1点)、「それほど必要とされず」(2点)、「どちらでもない」(3点)、「少し必要とされた」(4点)、「とても必要とされた」(5点)で回答してもらった。

地域住民満足度:地域住民が回答者本人の働きにどれだけ満足したと思うか、「全体的に言って、その時のあなたの働きに、地域の人々はどれくらい満足していたと思いますか」という質問に100点満点中何点かで回答してもらった。

地域担当期間と暮らし向き:地域担当の普及指導員を対象に、現在の担当地域に関わり始めてからの期間の長さを尋ねるとともに、その地域の暮らし向きについても尋ねた。地域の暮らし向きについては2項目が用意されており、「地域の人たちは、自分たちの暮らし向きに満足している」「地域の人たちの生活状況は問題ないものである」のそれぞれに1点(全くそう思わない)~7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求めた。

結果:まず「状況改善度」の分布を図11に示す。「少し改善した」「かなり改善した」を合わせると70%を超え、多くのケースで状況に改善が見られたと考えられていた。状況改善度の平均を算出すると2.11(標準偏差は0.73)であった。すなわち、全体を平均して、「少し改善した」以上の効果が普及活動を通して得られたことを示している。

また、「この状況であなたはどのくらい地域の人たちに必要とされていたと感じますか?」という項目の分布を図12に示す。「少し必要とされた」「とても必要とされた」を合わせると70%近くに達し、多くのケースで普及指導員が地域に求められていたことを示している。この項目の平均を算出すると4.01(標準偏差は0.81)であった。この結果は、全体を平均して「少し必要とされた」以上の必要度があったことを示している。

次に「地域住民満足度」の分布を図13に示す。この項目の平均を算出すると59.91(標準偏差は21.11)であった。図から明らかのように、回答者の多くがこの項目の midpoint である

「50点」よりも高い満足度を地域住民が得ていたと回答していた。

図 11. 状況改善度の分布

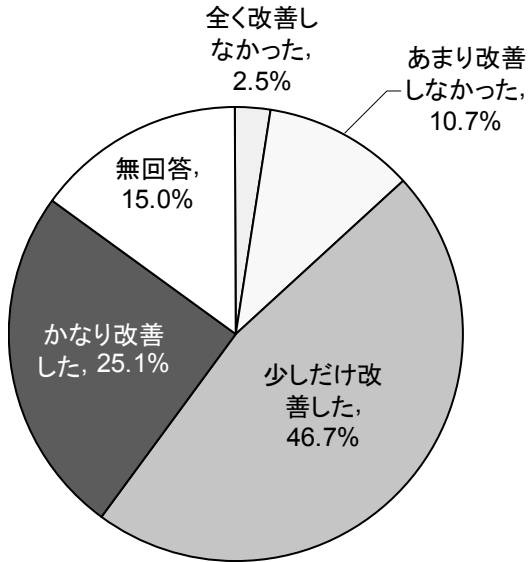


図 12. 地域から必要とされた度合いの分布

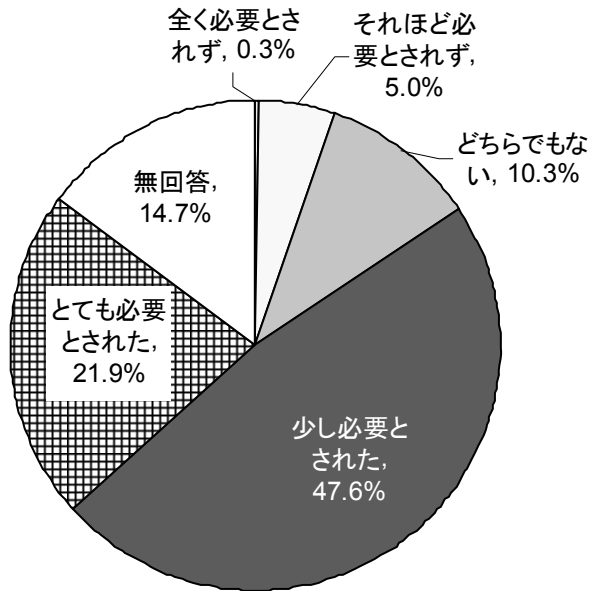
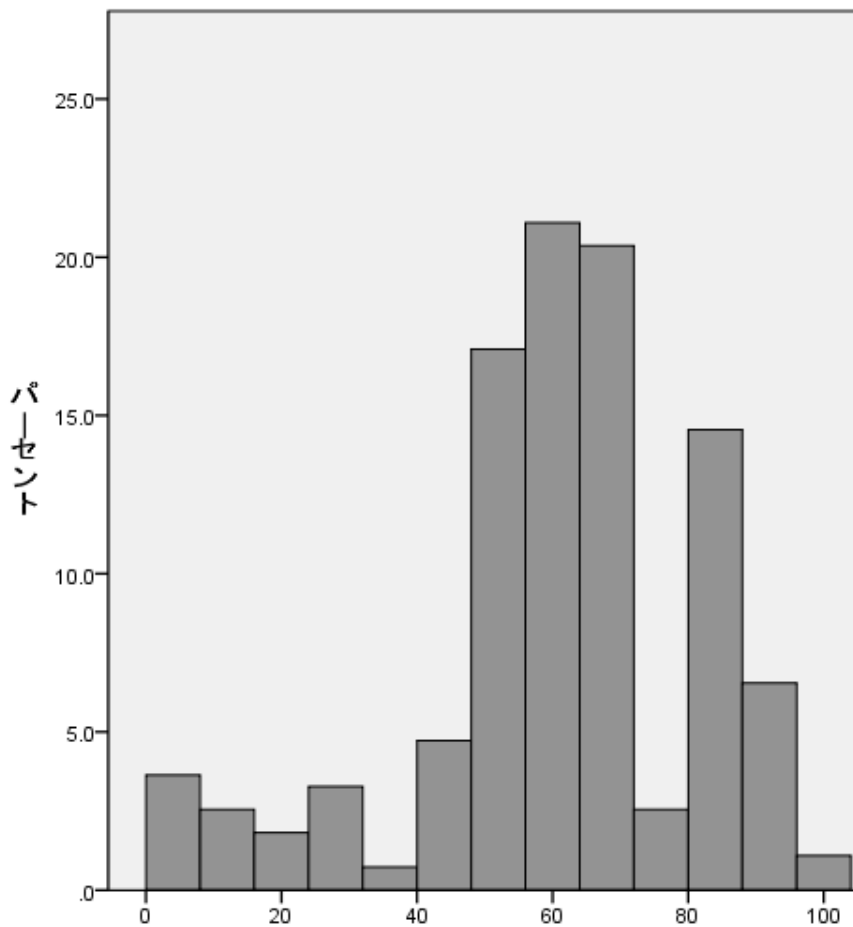
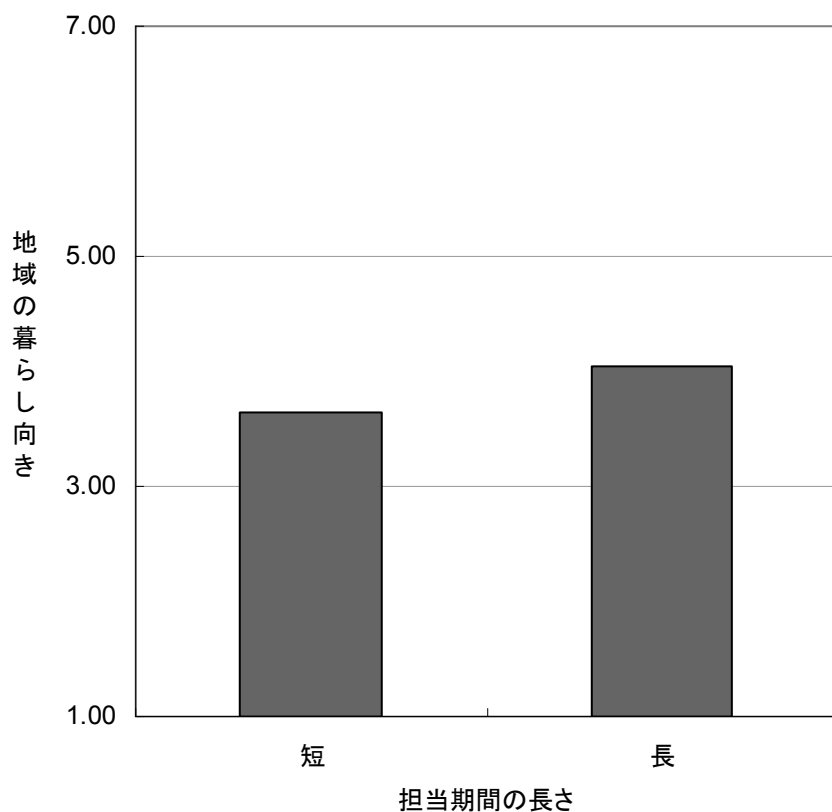


図 13. 地域住民満足度の分布



次に、地域の暮らし向きについての2項目（「地域の人たちは、自分たちの暮らし向きに満足している」「地域の人たちの生活状況は問題ないものである」）への回答を平均し、「地域の暮らし向き」得点を算出した⁸。もし、普及活動が地域の生活にポジティブな影響を及ぼしているのであれば、その地域と関わっている期間が長ければ長いほど、地域の暮らし向きが良くなっていることが期待される。そこで、担当期間の比較的長い群と比較的短い群に回答者を分け⁹、その間で「地域の暮らし向き」得点を比較した。図14にその結果を示す。担当期間が比較的長い群では、「地域の暮らし向き」がより良いと報告されていた¹⁰。この結果は、普及活動が地域の生活にとってポジティブな影響を及ぼしていることを示している。

図14. 地域に関わった期間の長さ、その地域の暮らし向き



⁸ この2項目の相関は、 $r = .667, p < .001$ で有意であった。

⁹ 中央値分割を行った。中央値は2.25年。

¹⁰ 統計的にも、この2群の差は有意であった： $t(148) = 2.08, p = .039$

8. 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因

日々の業務の中で感じる感情に、尊敬できる同僚の有無、担当地域の社会関係資本や自分の能力への自信、地域住民の暮らし向き、地域住民との親密な関係、そして、農業者と直接会う時間の長さが影響する。とくに、普及指導員のポジティブ感情は、地域の社会関係に強く規定されている。

目的:どのような職種でも、日々の業務の中で様々な感情を感じるが、幸福感や達成感、満足感など、ポジティブな感情を感じるが多ければ多いほど、仕事に対する動機付けが高くなると期待される。逆に、日々の業務の中で、悲しみや不安、挫折感など、ネガティブな感情を感じるが多ければ多いほど、仕事に対する動機付けが低下することが考えられる。本調査では、以上のことから、**普及指導員が日々の業務の中で感じる感情を調べ、そうした感情に影響する要因を明らかにする**ことを通じて、仕事に対する動機付けを高める要因の解明を目指した。近年の普及指導員の業務においては、行政関連の業務など事務仕事の増加などのために、直接農業者に会う時間が減少しているとの声が多く聞かれる(例えば、近畿ブロック普及活動研究会の平成20年度調査研究報告)。そこで農業者に直接接する時間の多さが業務内で感じる感情経験に与える影響についても検討した。

方法:「幸せを感じる」「憂鬱な気分になる」「悲しみを感じる」「誇りを感じる」など、計29項目の感情のそれぞれについて、「日頃どの程度その気持ちを感じているか」を1点(全くない)から5点(非常によくある)で回答を求めた。

また、これらの感情経験との関連を検討する項目として、下記の項目を測定した。

地域住民の信頼性・信頼感:地域担当の回答者を対象に、「地域の人たちは、基本的に善良で親切である」「地域の人たちは、基本的に正直で率直である」「地域の人たちは、お互いを信じ合っていると思う」「地域の人たちは一般に信用できる人たちである」「地域の人たちは、他人を信用していないと思う(逆転項目)」「地域の人たちは、私を信じてくれていると思う」「地域の人たちは、自分たちの地域や郷土に誇りを持っている」「地域の対人関係はおおむね円滑だ」のそれぞれに1点(全くそう思わない)～7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求めた。この8項目は全体として、地域の人々の信頼性(あるいは誠実性)およびお互いに対する信頼感などを測定している。これは、社会学等の分野で「社会関係資本(social capital)」と呼ばれる概念の重要な一側面をなすもので、コミュニティーが円滑に機能する上で欠かすことのできないものであると指摘されている(参考: ロバート・パットナム/ 柴内康文訳「孤独なボウリング: 米国コミュニティーの崩壊と再生」, 2006 など)。

地域内の問題に対処する自己能力:地域担当の回答者を対象に、「地域の中で対人的にうまく行動する能力について自信を持っている」「地域の中で生じるおおかたの問題に私は対応できる」「地域の中で予期せぬ問題が生じたら、うまく処理する自信がない(逆転項目)」のそれぞれに1点(全くそう思わない)～7点(強くそう思う)の7点方式で回答を求め

た。この 3 項目は全体として、自分の担当している地域で普及活動を円滑に行うための能力に対する自己評価を測定している。

地域の暮らし向き:項目 7「普及活動の必要性」参照

担当地域の住民との付き合いの量および質:地域担当の回答者を対象に、「ふだん、あいさつをかわす人」「うれしいことがあったときに、知らせたい人」「相手の居宅を訪ねる人」「電話で連絡を取る人」など、様々なタイプの付き合いに関して、そうした付き合いをする人が地域の中に何人ぐらいいるかを尋ねた。

直接農業者に会う時間:全業務のうち直接農業者に会って普及活動にあたる時間の比率を尋ねた(20%未満, 20~40%未満, 40~60%未満, 60~80%未満, 80%以上のうちいずれかを選択)。

尊敬する普及指導員の有無:項目 4「尊敬される普及指導員の姿」を参照のこと。

結果:感情についての 29 項目の回答結果から、互いに類似した回答パターンを示した項目をまとめると、表 4 のように分類された¹¹。そこで、ネガティブ感情とポジティブ感情のそれぞれで項目を平均した得点を算出した。この「ネガティブ感情得点」と「ポジティブ感情得点」を用いて、他の変数との関係を検討した。感情得点と他の変数の、性別並びに年齢ごとの平均値を表 5~表 7 に示す。また、感情得点とその他の変数の関係を検討した結果を、表 8 ならびに図 15~図 20 に示す。

¹¹ 主因子法による因子分析を実施したところ、固有値のパターンから 2 因子構造が示唆された。そこで、因子数を 2 に設定し、プロマックス回転をかけた因子分析を実施したところ、表 2 で「ネガティブ感情」に分類されている項目は第 1 因子に対する負荷が高く(0.40 以上)、「ポジティブ感情」に分類されている項目は第 2 因子に対する負荷が高かった(同じく、0.40 以上)。なお、因子間相関は-0.16 であった。

表 4. 業務の中で感じる感情の分類

ネガティブ感情	ポジティブ感情
憂鬱な気分になる	幸せを感じる
怒りを感じる	落ち着いた気分を感じる
悲しみを感じる	うきうきした気分になる
恐怖を感じる	くつろいでいると感じる
不幸せだと感じる	誰かに親しみを感じる
心配になる	誇りを感じる
欲求不満を感じる	喜びを感じる
絶望的な気持ちになる	満足だと感じる
恥を感じる	機嫌がいい
不安を感じる	自分は健康であると思う
不満を感じる	何か楽しみがあると感じる
何もできなくなる	
暗くなる、沈み込む	
泣いたり、泣きたくなる	
口数が少なくなる	
一人になりたくなる	
悩みがある	
孤独を感じる	

表 5. 感情経験ならびにその他の連続変数の男女別平均値ならびに性差の検定

	サンプル全体			男性			女性		
	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)
ポジティブ感情	261	2.75	(.67)	194	2.74	(.66)	53	2.81	(.69)
ネガティブ感情	261	2.08	(.65)	194	2.12	(.67)	53	1.96	(.57)
地域住民の信頼性・信頼感	165	5.04	(.68)	117	5.07	(.71)	37	4.97	(.61)
地域内の問題に対処する自己能力	163	3.94	(1.02)	115	3.92	(1.02)	37	4.00	(1.02)
地域の暮らし向き	163	3.83	(1.16)	115	3.82	(1.16)	37	3.95	(1.17)
「軽い関係」の人数	146	40.42	(57.25)	105	44.03	(65.39)	33	28.42	(24.46)
「中程度の関係」の人数	145	11.83	(12.45)	103	12.11	(13.24)	33	10.36	(10.67)
「親密な関係」の人数	142	4.28	(4.66)	100	4.12	(4.49)	33	4.30	(4.87)

	性差の検定			
	F	df1	df2	p
ポジティブ感情	.38	1	245	.540
ネガティブ感情	2.29	1	245	.132
地域住民の信頼性・信頼感	.50	1	152	.481
地域内の問題に対処する自己能力	.15	1	150	.701
地域の暮らし向き	.32	1	150	.572
「軽い関係」の人数	1.79	1	136	.183
「中程度の関係」の人数	.47	1	134	.493
「親密な関係」の人数	.04	1	131	.846

表5の通り、ポジティブ感情、ネガティブ感情、地域住民の信頼性・信頼感、地域内の問題に対処する自己能力、地域の暮らし向き、軽い関係の人数、中程度の関係の人数、親密な関係の人数(軽い関係、中程度の関係、親密な関係の分類については42ページに記載の通り)のいずれでも性差は見られなかった。また、地域内の関係性については軽い関係は40名程度、中程度が11名程度、親密な関係は4名程度となっていた。

表 6. 感情経験ならびにその他の連続変数の世代別平均値ならびに性差の検定

	30代以下			40代			50代以上		
	n	M	(SD)	n	M	(SD)	n	M	(SD)
ポジティブ感情	66	2.78	(.61)	109	2.66	(.69)	76	2.87	(.63)
ネガティブ感情	66	2.09	(.63)	109	2.17	(.69)	76	1.94	(.56)
地域住民の信頼性・信頼感	47	5.02	(.60)	76	5.01	(.72)	34	5.17	(.56)
地域内の問題に対処する自己能力	47	3.75	(1.11)	75	4.01	(1.06)	33	4.09	(.77)
地域の暮らし向き	47	3.79	(1.06)	75	3.91	(1.24)	33	3.76	(1.11)
「軽い関係」の人数	41	36.89	(50.31)	69	39.47	(53.14)	31	49.92	(76.71)
「中程度の関係」の人数	41	10.38	(9.45)	68	14.55	(14.98)	30	8.92	(9.27)
「親密な関係」の人数	40	4.13	(4.53)	67	4.21	(3.96)	29	4.74	(6.51)

	年代(3カテゴリ)差の検定			
	F	df1	df2	p
ポジティブ感情	2.31	2	248	.102
ネガティブ感情	2.72	2	248	.068
地域住民の信頼性・信頼感	.79	2	154	.456
地域内の問題に対処する自己能力	1.31	2	152	.272
地域の暮らし向き	.28	2	152	.754
「軽い関係」の人数	.49	2	138	.615
「中程度の関係」の人数	2.69	2	136	.072
「親密な関係」の人数	.16	2	133	.850

表6の通り、ネガティブ感情と中程度の関係の人数に有意傾向の世代差が見られた。ネガティブ感情は事後検定(Tukey's HSD)によると40代 > 50代以上の差が $p = .053$ であり、40代から50代にかけてネガティブ感情が軽減される傾向にあることが示唆された。中程度の関係の人数は30代より40代で増加し、50代でまた減少するというパターンのもようであったが、事後検定では有意傾向以上の効果は見られなかった。

表 7. 尊敬する同僚の有無ならびに直接農業者に会う時間の比率の性別・世代別の検討

		サンプル全体		男性		女性	
		n	(有効%)	n	(有効%)	n	(有効%)
尊敬する同僚の有無	いる(いた)	292	(93.3%)	185	(93.0%)	54	(94.7%)
	いない(いなかった)	21	(6.7%)	14	(7.0%)	3	(5.3%)
	合計	313	(100.0%)	199	(100.0%)	57	(100.0%)
直接農業者に会う時間の比率	20%未満	89	(34.6%)	71	(36.8%)	15	(27.3%)
	20~40%未満	78	(30.4%)	58	(30.1%)	18	(32.7%)
	40%以上	90	(35.0%)	64	(33.2%)	22	(40.0%)
	合計	257	(100.0%)	193	(100.0%)	55	(100.0%)

		サンプル全体		30代以下		40代以下		50代以上	
		n	(有効%)	n	(有効%)	n	(有効%)	n	(有効%)
尊敬する同僚の有無	いる(いた)	292	(93.3%)	62	(93.9%)	102	(91.9%)	78	(95.1%)
	いない(いなかった)	21	(6.7%)	4	(6.1%)	9	(8.1%)	4	(4.9%)
	合計	313	(100.0%)	66	(100.0%)	111	(100.0%)	82	(100.0%)
直接農業者に会う時間の比率	20%未満	89	(34.6%)	13	(20.6%)	31	(28.4%)	43	(54.4%)
	20~40%未満	78	(30.4%)	24	(38.1%)	30	(27.5%)	23	(29.1%)
	40%以上	90	(35.0%)	26	(41.3%)	48	(44.0%)	13	(16.5%)
	合計	257	(100.0%)	63	(100.0%)	109	(100.0%)	79	(100.0%)

表7は尊敬する同僚の有無ならびに直接農業者に会う時間の比率の世代、性別ごとのクロス表である。いずれの指標でも性差は見られなかったが($\chi^2_s < 1.79$, ns)、直接農業者に会う時間の比率については世代差が見られた($\chi^2(4) = 26.36$, $p < .0001$)。50代以上では直接農業者に会う時間が減少しているようである。これは管理職などの業務に従事するようになるためであることが考えられる。

表 8 は、感情経験と年齢ならびにキャリア年数との関連を検討した結果である。Pearsonの相関係数、Spearmanの順位相関係数ともに年齢が高いほど、ネガティブ感情が少ないという結果が得られた。キャリア年数はいずれも有意な相関をもたなかった。これは従来の幸福感研究で示されてきたように、年齢が高くなるほど、ネガティブなイベントへのリアクションが低くなり、ネガティブ経験が少なくなるという知見と一致している(たとえば Charles, Reynolds, & Gatz, 2001 など)。しかし別の見方をすれば、普及指導員として年齢が高いほど周囲からの信頼を得られているために、ネガティブな感情を業務内で感じずにいられるようになっているとも考えられる(年齢と信頼の関係に関しては、項目 9「若年者ステレオタイプに関連する結果」で詳しく述べる)。

表 8. 感情経験と年齢・キャリアの相関

	ネガティブ感情		ポジティブ感情	
Pearson				
年齢	-.12	(.055)	.00	(.964)
キャリア年数	-.06	(.350)	.03	(.659)
Spearman				
年齢	-.13	(.044)	.03	(.601)
キャリア年数	-.03	(.650)	.05	(.452)

括弧内は p 値

図 15 では、尊敬する普及指導員がいる(あるいは、過去にいた)と回答したケースと、そうした人物がいない(あるいは、過去にもいなかった)と回答したケースで、ネガティブ感情とポジティブ感情の得点を比較している。普及指導員の知識・技術の獲得において、On the Job Training の重要性は繰り返し指摘されているところではあるが(例えば、近畿ブロック普及活動研究会の平成 21 年度調査研究報告参照)、本調査の結果からも、尊敬できる同僚の存在の重要性が示された。図 15 に見られるように、尊敬する普及指導員の有無はネガティブ感情には特に影響しなかったものの、ポジティブ感情では群間に差が見られた。尊敬する普及指導員がいると答えた回答者は、いないと答えた回答者よりも日々の業務の中でポジティブ感情を経験していることが示された¹²。

図 16 では、「地域住民の信頼性・信頼感」とネガティブ感情およびポジティブ感情の関係を検討した。「地域住民の信頼性・信頼感」8 項目の平均得点を算出し¹³、比較的得点の低かった群と高かった群を、ネガティブ感情およびポジティブ感情について比較した結果が図 16 である¹⁴。ネガティブ感情とポジティブ感情の両方に対して、「地域住民の信頼性・信頼感」の効果が見られた。すなわち、「地域住民の信頼性・信頼感」の評価が高かった回答者は、この得点が低かった回答者に比べて、業務の中でネガティブ感情をあまり経験せず、ポジティブ感情をより経験していたことが示された¹⁵。

¹² 尊敬する普及指導員の有無の効果は、ネガティブ感情に対しては統計的に有意ではなく($F(1, 256) = .15, p = .699$)、ポジティブ感情に対しては有意であった($F(1, 256) = 13.31, p < .001$)。

¹³ 「地域住民の信頼性・信頼感」の 8 項目で信頼性分析を行った結果、 $\alpha = .806$ で、十分な内的一貫性が示された。

¹⁴ 「地域住民の信頼性・信頼感」の得点で中央値分割を行った。中央値は 5。

¹⁵ 「地域住民の信頼性・信頼感」の効果は、ネガティブ感情でもポジティブ感情でも統計的に有意であった(順に、 $F(1, 162) = 6.90, p = .009$; $F(1, 162) = 21.17, p < .001$)。

図 15. 尊敬する普及指導員の有無と業務の中で感じる感情

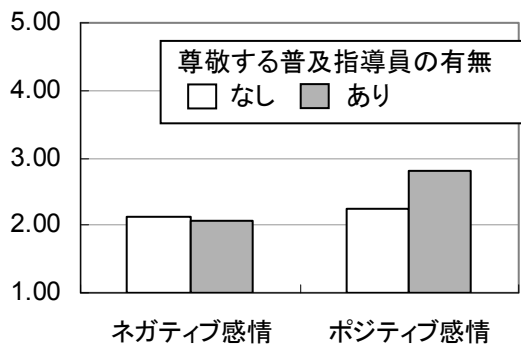


図 16. 担当地域住民の信頼性・信頼感の高低と業務の中で感じる感情

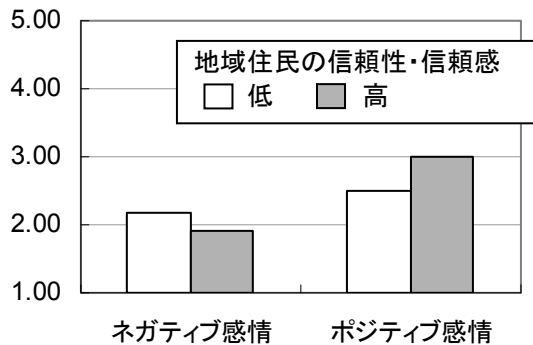


図 17 では、「地域内の問題に対処する自己能力」とネガティブ感情およびポジティブ感情の関係を検討した。「地域内の問題に対処する自己能力」3 項目の平均得点を算出し¹⁶、比較的得点の低かった群と高かった群を、ネガティブ感情およびポジティブ感情について比較した結果が図 17 である¹⁷。図 17 に見られるように、ネガティブ感情とポジティブ感情の両方に対して、「地域内の問題に対処する自己能力」の効果が見られた。すなわち、「地域内の問題に対処する自己能力」の評価が高かった回答者は、この得点が低かった回答者に比べて、業務の中でネガティブ感情をあまり経験せず、ポジティブ感情をより経験していたことが示された¹⁸。

図 18 では、「地域の暮らし向き」(項目 7.普及活動の必要性参照)とネガティブ感情およびポジティブ感情の関係を検討した。「地域の暮らし向き」に関しては既述のとおり、地域内の生活の良好性を表している。この得点の低かった群と高かった群をネガティブ感情およびポジティブ感情について比較した結果¹⁹、図 18 に見られるように、ネガティブ感情ではほとんど差がなかったが、ポジティブ感情で差が見られた。すなわち、担当地域の暮らし向きが良い回答者ほど、日々の業務の中でポジティブな感情を経験していることが示された²⁰。

¹⁶ 「地域内の問題に対処する自己能力」の3項目で信頼性分析を行った結果、 $\alpha = .716$ で、十分な内的一貫性が示された。

¹⁷ 「地域内の問題に対処する自己能力」の得点で中央値分割を行った。中央値は4。

¹⁸ 「地域内の問題に対処する自己能力」の効果は、ネガティブ感情でもポジティブ感情でも統計的に有意であった(順に、 $F(1, 161) = 4.22, p = .042$; $F(1, 161) = 14.27, p < .001$)。また、地域内の問題に対処する自己能力の効果は年齢の効果を統制しても有意であった。

¹⁹ 「地域の暮らし向き」の得点で中央値分割を行った。中央値は4。

²⁰ 「地域の暮らし向き」の効果は、ネガティブ感情に対しては統計的に有意ではなく($F(1, 161) = .80, p = .373$)、ポジティブ感情に対しては有意であった($F(1, 161) = 4.38, p = .038$)。

図 17 地域内の問題に対処する自己能力と業務の中で感じる感情

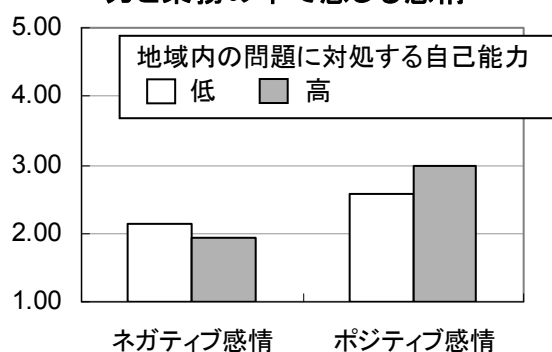
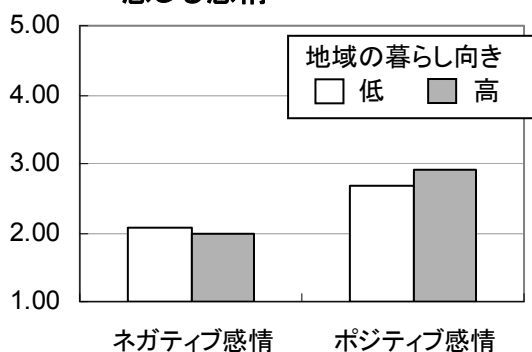


図 18. 地域の暮らし向きと業務の中で感じる感情



次に、担当地域の住民との付き合いの量および質と、業務の中で感じる感情の関係について検討した。付き合いの量及び質についての質問に関して、互いに類似した回答パターンを示した項目をまとめると、表 9 のように「軽い関係」「中程度の関係」「親密な関係」に分類された²¹。図 19-1～図 19-3 では、「軽い関係」「中程度の関係」「親密な関係」のそれぞれの人数と、業務の中で感じる感情の関係を検討している²²。図 19-1 および図 19-2 に見られるように、「軽い関係」および「中程度の関係」の人数は、ネガティブ感情にもポジティブ感情にも影響を与えていなかった²³。一方、「親密な関係」の人数は感情と関係し(図 19-3)、ネガティブ感情では差がなかったものの、「親密な関係」の相手が多い方がよりポジティブな感情を業務の中で感じていることが示された²⁴。

表 9. 普及活動で関わっている地域の住民との付き合いの分類

軽い関係	中程度の関係	親密な関係
ふだん、あいさつをかわす人	電話で連絡を取る人	うれしいことがあったときに、知らせたい人
立ち話をする人	その人の家や仕事場の近くに行く用がある時、連絡をとってみようと思う人	悩んだ時や困った時に、話を聞いてもらいたい人
		メールで連絡を取る人

直接農業者に会う時間の比率とネガティブ感情・ポジティブ感情の関係を検討した結果、図 20 に見られるように、ネガティブ感情では大きな差は見られなかったものの、ポジティブ

²¹ 主因子法による因子分析を実施したところ、固有値のパターンから3因子構造が示唆された。そこで、因子数を3に設定し、プロマックス回転をかけた因子分析を実施したところ、表5で「軽い関係」に分類されている項目は第1因子に対する負荷が高く(0.90以上)、「中程度の関係」に分類されている項目は第2因子に対する負荷が高かった(0.60以上)。また、「親密な関係」に分類されている項目は第3因子に対する負荷が高かった(0.40以上)。なお、因子間相関は0.35~0.52であった。

²² 「軽い関係」「中程度の関係」「親密な関係」のそれぞれで中央値分割を行った。中央値は、順に、25人、7.5人、2.67人であった。

²³ 統計的検定の結果、「軽い関係」では $F(1, 144) = 1.02, p = .315$ (ネガティブ感情); $F(1, 144) = .04, p = .840$ (ポジティブ感情)で、「中程度の関係」では $F(1, 143) = .01, p = .924$ (ネガティブ感情); $F(1, 143) = .19, p = .665$ (ポジティブ感情)であった。

²⁴ ネガティブ感情については $F(1, 140) = .02, p = .877$ で有意な効果はなく、ポジティブ感情では $F(1, 140) = 10.67, p = .001$ で統計的に有意な効果が見られた。

感情において、直接農業者に会う時間がより長いほどポジティブ感情を経験していることが示された²⁵。この結果は、普及指導員本人の感情経験の面でも（ひいては、業務に対する動機付けの面でも）、直接農業者に会って普及活動を行うことが重要であることを示している。

図 19-1. 地域住民との関係と業務の中で感じる感情:「軽い関係」の人数の効果

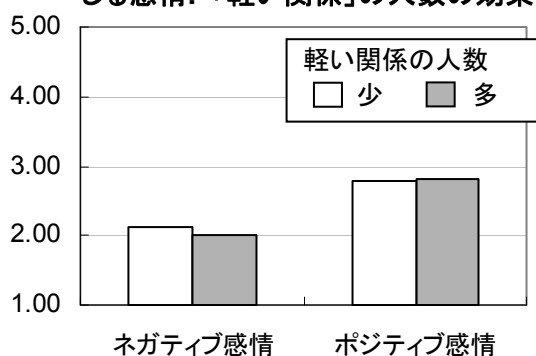


図 19-2. 地域住民との関係と業務の中で感じる感情:「中程度の関係」の人数の効果

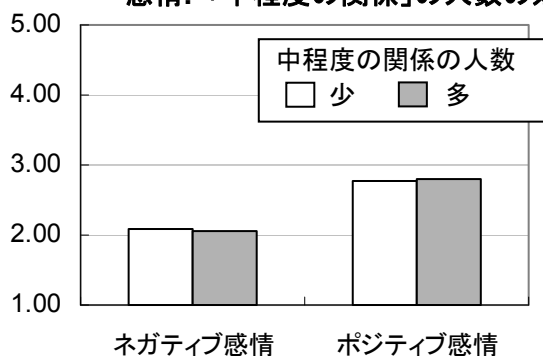


図 19-3. 地域住民との関係と業務の中で感じる感情:「親密な関係」の人数の効果

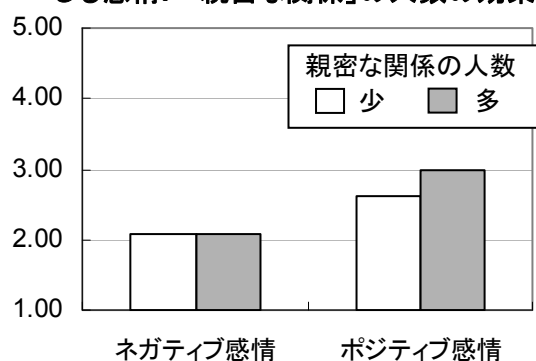
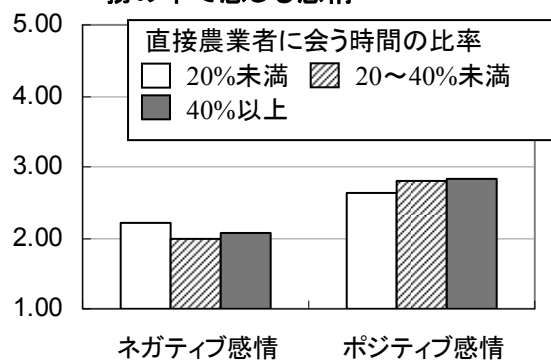


図 20. 直接農業者に会う時間の比率と業務の中で感じる感情



²⁵ 統計的検定の結果、ネガティブ感情に対する効果は有意ではなく($F(2, 244) = 2.29, p = .104$)、ポジティブ感情に対する効果は有意傾向であった($F(2, 244) = 2.50, p = .084$)。

最後に、感情経験を従属変数、「地域住民の信頼性・信頼感」と「地域内の問題に対処する自己能力」「尊敬される普及指導員の有無」を従属変数とした重回帰分析を行い、いずれがより感情経験を強く規定しているのかを検討した²⁶。結果、表 10 の通り、ポジティブ感情には「地域住民の信頼性・信頼感」が最も強い効果を持っており、地域の関係性が良好であることが、業務内でのポジティブな感情経験の上昇につながっていることが明らかになった。ネガティブ感情においては自己能力の効果の方が大きく、問題に対処する能力が低いと知覚されるときに、業務内でのネガティブな感情が経験されやすいことも示された。

表 10. 普及指導員の感情経験に対する標準化偏回帰係数

	ポジティブ感情	ネガティブ感情
地域住民の信頼性・信頼感	.35***	-.19*
地域の問題に対処する自己能力	.24**	-.32***
尊敬する普及指導員の有無(0 = 無, 1 = 有)	.25***	.02
R^2	.29***	.16***

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

²⁶ 「地域の暮らし向き」「担当地域の住民との親密な関係」「直接農業者に会う時間」も同時に投入したステップワイズ法による重回帰分析を最初に行ったところ、これらの効果はいずれも有意ではなかった。

9. 若年者ステレオタイプに関連する結果

目的①:若年の普及指導員は、普及指導員としてのキャリアの短さなどのため、ベテラン普及指導員に比べて様々な面での知識・技術が不足し、そのために普及活動の様々な場面で苦勞を抱えていると考えられる。しかし、実際の知識・技術不足に加えて、「若い者には、十分な知識・技術がない」とする若年者ステレオタイプを農業者などが持つことで、**若年の普及指導員が必要以上の苦勞を強いられている可能性**がある。すなわち、「若い者には、十分な知識・技術がない」という若年者ステレオタイプを農業者が持つ場合、若年普及指導員は実際に知識や技術がないからではなく、年齢そのものために農業者などから信頼を得ることができず、実際に持っている知識・技術を十分に発揮することができない可能性があると考えられる。このことは、「若年普及指導員は役に立たない」という信念が、その信念に基づく農業者の意思決定のために自己成就していることを意味する。この点を検討するための分析を行った。

方法①:「地域住民の信頼性・信頼感」「地域内の問題に対処する自己能力」「地域の暮らし向き」を普及指導員の活動のパフォーマンスの指標として捉え、普及指導員としてのキャリアを統制しつつ、これらのパフォーマンス変数と年齢の偏相関を検討した(表 11)²⁷。

それぞれの指標については「7. 普及活動の必要性」「8. 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因」の項目を参照のこと。

結果①:表 11 の通り、Pearson の相関係数ではいずれでも相関が見られず、Spearman の順位相関係数でも「地域内の問題に対処する自己能力」や「地域の暮らし向き」と年齢の間には相関が見られなかったが、地域の社会関係資本を表す「地域住民の信頼性・信頼感」は年齢と正の相関を示した。この結果は、年齢の高い普及指導員ほど、キャリアとは独立に、地域の社会関係資本構築という普及活動の重要な側面で高いパフォーマンスを上げている(逆に、年齢の若い普及指導員は、地域の社会関係資本構築において、年齢の高い普及指導員ほどのパフォーマンスを上げることができていない)ことを示唆し、上述の若年者ステレオタイプについての仮説を支持している²⁸。

²⁷ 「地域住民の信頼性・信頼感」「地域内の問題に対処する自己能力」「地域の暮らし向き」は、地域担当の普及指導員のみを対象として測定されている。

²⁸ ただし、この結果には別解釈があることも付記しておきたい。すなわち、図 21 に示されているように、キャリアの短い層には年齢の高い普及指導員も含まれるが、これらの高年齢・新人普及指導員は、普及活動に限定されない様々な「世知」をそれまでの経験で得ている可能性がある。この一般的世知が、普及活動においてもポジティブな効果をもたらし、地域の社会関係資本を高めている可能性も考えられる。

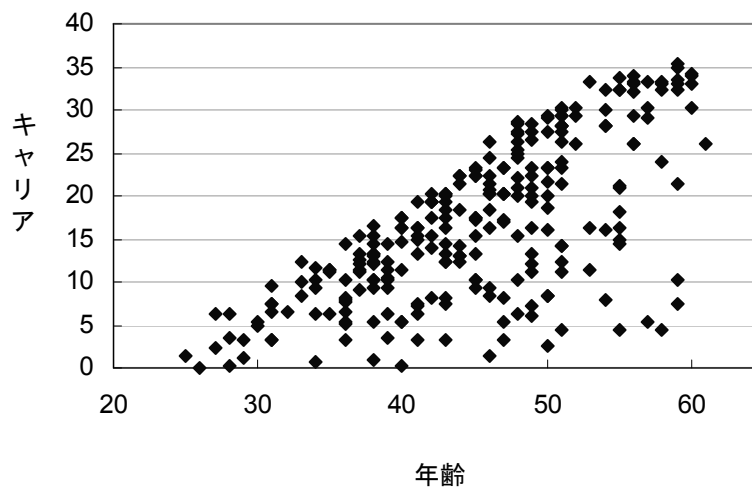
表 11 普及指導員の年齢と普及活動パフォーマンスの偏相関
(キャリアを統制)

	Pearson	Spearman
地域住民の信頼性・信頼感	.12	.17 *
地域内の問題に対処する自己能力	.06	.08
地域の暮らし向き	.01	-.01

* $p < .05$

なお、普及指導員の年齢とキャリアの関係を図 21 に示す。図から明らかなように、キャリアの短い普及指導員の中には、比較的高齢の者も少なからず含まれていた。

図 21. 普及指導員の年齢とキャリアの関係



目的②:若年者ステレオタイプが若年普及指導員にとってポジティブに働く場面があることも考えられる。そのひとつが、若年者ステレオタイプの存在によって、若年普及指導員が相互作用相手(e.g., 農業者)に「教えを請う」ことを行いやすくしている可能性である。若年の普及指導員に対してベテラン農業者が多くを期待していないことはすでに指摘されている(e.g., 近畿ブロック普及活動研究会の平成 20 年度調査研究報告)。また、ベテラン農業者の中には、若年普及指導員を「育てよう」という姿勢を持つ人々もいることが指摘されている(e.g., 全国農業改良普及協会「進めよう自己研修・職場研修: 上手になろう普及活動の進め方」)。こうしたことから、「若い者には、十分な知識・技術がない」とする若年者ステレオタイプは、逆に、「若い者は知らなくても仕方ない」という農業者の許容的態度につながるものが考えられる。この場合、若年普及指導員の立場からは、知識不足・技術不足を補うためにベテラン農業者に「教えを請う」ことが容易になると考えられる。

方法②:この仮説を検証するために、本調査では、次の項目を設けた。まず、「農業者やその他の関係者とのやり取りの中で、自分の知識では答えられないことが問題になったことはありますか？」を尋ね、「あった」と答えた回答者に、そうした場面で「知識がないことについては明らかにしなかった」「知識がないことを正直に認めた」のいずれの行動を取ることが多かったかを尋ねた。もし若年者ステレオタイプが、若年普及指導員が知識を持っていないことへの許容的態度をもたらし、ひいては若年普及指導員を育てる行動につながるのであれば、若年普及指導員の間では、年齢の高い普及指導員の場合よりも、「知識がないことを正直に認めた」行動が、その後の普及活動のパフォーマンスを高めやすいと予測される。

結果②:本調査のデータでは、この予測の検証はできなかった。「農業者やその他の関係者とのやり取りの中で、自分の知識では答えられないことが問題になったこと」があったと答えた回答者にその時の対処について尋ねたところ、「知識がないことを正直に認めた」が全体の 58.6%(187 名)、無回答(該当する経験がなかった回答者を含む)が 38.6%(123 名)で、「知識がないことについては明らかにしなかった」は 2.8%(9 名)しかいなかった。そのため、「知識がないことを正直に認めた」群と「知識がないことについては明らかにしなかった」群を年齢グループごとに比較し、パフォーマンスへの影響を検討することは断念せざるを得なかった。

10. OJT の必要性に関連する結果

目的:先輩普及指導員に付き添われての **On the Job Training (OJT) の重要性**は、普及活動の分野においても繰り返し指摘されている(e.g., 近畿ブロック普及活動研究会の平成 21 年度調査研究報告; 全国農業改良普及協会「進めよう自己研修・職場研修: 上手になろう普及活動の進め方」)。

普及活動における OJT のポジティブな効果としては、次の 3 点が考えられる。第一に、OJT の最も直接的な効果のひとつとして、キャリアの浅い普及指導員が先輩普及指導員の仕事を直に見る機会を持つことで、**明文化しにくい知識・技術の伝達が容易になる**ことである。第二に、キャリアの浅い普及指導員が自ら業務を担当する際、先輩普及指導員が付き添い、すぐに修正・訂正・カバー等を行えるようにすることで、**失敗した時のコストを抑えたまま実体験を積むことができる**点が挙げられる。実体験が知識・技術の獲得において重要な役割を果たすことは論を待たない。第三に、先に検討した若年者ステレオタイプに関連した効果も考えられる。若年普及指導員が業務を担当する際に、先輩普及指導員がそのバックアップを担う(すぐに修正・訂正・カバーを行う)ことで、**農業者に対しても安心感を与える**ことができる。農業者が安心感を持つことは、結果として、(先輩普及指導員のバックアップに媒介された形で)若年普及指導員の仕事への信頼を生み出すことが期待される。

以上の議論から OJT の重要性は明らかであるが、OJT の実施は年々減少していることが指摘されている。

方法①: 既述のとおり、本調査では、直属の上司や先輩・同僚普及指導員など、各種人物から「助けられた」経験の有無を尋ねている(6.「地域の抱える問題のタイプと普及指導員の必要とするサポート」参照)。また、これらの項目は、「自分が難しい課題に直面した時」のことについて尋ねており、それがいつの経験であったかは回答者によって異なっていた。

結果①: 自分が難しい課題に直面した経験の時期と、各種人物からのサポートの有無の関係を検討したところ、表 12 の結果が得られた。

表 12. 過去に経験した事例の時期とその事例において各種人物から「助けられた」経験の有無の関係

	1999 年以前	2000-2002 年	2003-2005 年	2006-2009 年	χ^2	df	p
普及指導員	13 (92.9%)	57 (82.6%)	56 (96.6%)	86 (85.1%)	6.78	3	.079
農業者	10 (71.4%)	39 (56.5%)	28 (48.3%)	52 (51.5%)	2.86	3	.414
役所の職員	5 (35.7%)	30 (43.5%)	17 (29.3%)	32 (31.7%)	3.50	3	.321
地域のリーダー	11 (78.6%)	45 (65.2%)	28 (48.3%)	37 (36.6%)	18.25	3	.000
自分の家族や友人	4 (28.6%)	7 (10.1%)	7 (12.1%)	6 (5.9%)	7.55	3	.056
JA	8 (57.1%)	29 (42.0%)	20 (34.5%)	37 (36.6%)	2.94	3	.401

註: ①時期カテゴリー別に、各種人物から「助けられた」と回答したケースの度数、および、時期カテゴリー内でのケースの占める比率を算出。③ χ^2 検定は、人物タイプごとに、時期カテゴリーとサポートの有無の関係を検討。

また、各種人物について、横軸に時期(西暦)、縦軸にその人物からサポートを受けたケースの比率(年毎の比率)を取った散布図を作成した(図 22-1～図 22-6)²⁹。表 12 および図 22-1 に見られるように、同僚・先輩・上司・専門技術員を含んだ「普及指導員」からのサポートは一貫して高い傾向にあったが、特に 10 年前、ならびに 4~6 年前には高い傾向にあった³⁰。また、OJT とは直接関係しないが、地域のリーダーからのサポートも明らかな減少傾向にあった。先述の通り、地域のリーダーからのサポートは普及活動において重要な役割を果たしている。その意味で、地域のリーダーからのサポートが減少していることは重要な問題である。

²⁹ 2000 年より古いデータは数が少ないため、図 21-1～図 21-6 では省略した。

³⁰ 本調査では「助けられた」と感じた経験について尋ねており、OJT の経験を必ずしも正しく反映しているとは限らない。OJT のように、そもそもサポートされることがある程度予期される状況では、「助けられた」と特に強く感じることは少ない恐れがある。

図 22-1. 普及指導員からの
サポートと事例の時期

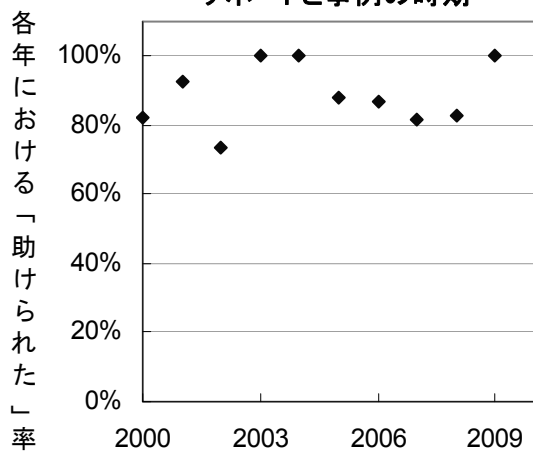


図 22-2. 農業者からのサポートと
事例の時期

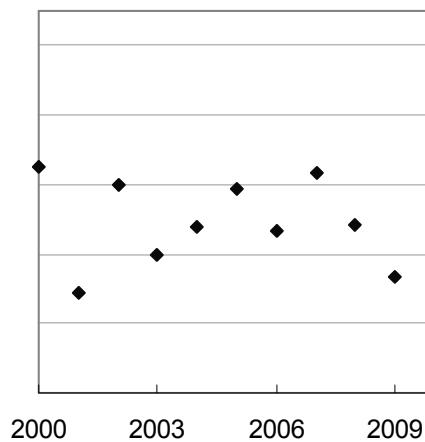


図 22-3. 役所の職員からの
サポートと事例の時期

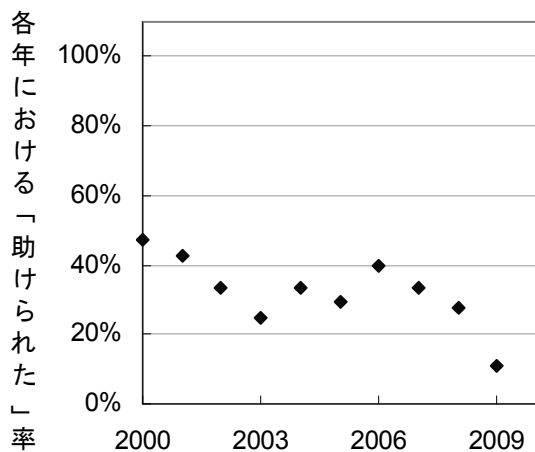


図 22-4 地域のリーダーからの
サポートと事例の時期

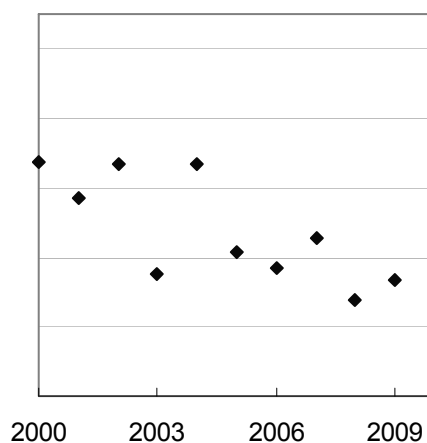


図 22-5. 自分の家族や友人からの
サポートと事例の時期

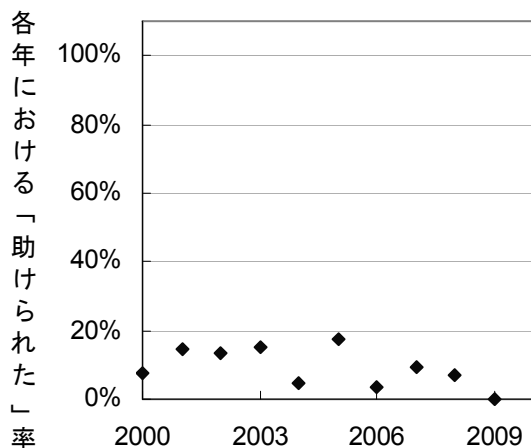
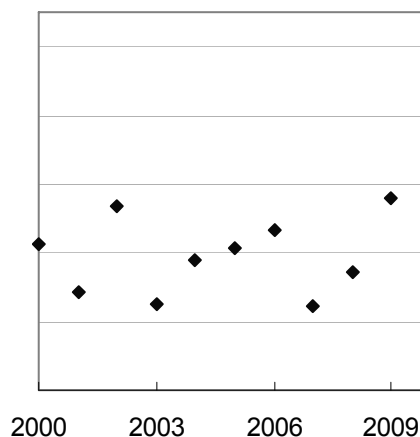


図 22-6. JA からのサポートと
事例の時期



方法②:次に、尊敬できる同僚(先輩を含む)の存在が、普及活動のパフォーマンスに影響するかどうかについても検討した。「尊敬される普及指導員の姿」で紹介したように、各回答者は、自分の尊敬する普及指導員が 41 の特徴のうちいずれを持っているかを回答していた。そこで、この 41 項目のうちいくつかの項目に「当てはまる」あるいは「とてもよく当てはまる」と回答したか(すなわち、自分の尊敬する普及指導員が、どれだけ多くの特徴を持っているか)と、回答者本人のパフォーマンスの関係を検討した。パフォーマンスの変数としては、「地域住民満足度」「状況改善度」「地域住民の信頼性・信頼感」「地域内の問題に対処する自己能力」「地域の暮らし向き」を用いた。前 2 者は「自分が難しい課題に直面した時」のパフォーマンス(過去の事例におけるパフォーマンス)で、後 3 者は現在担当している地域でのパフォーマンスである(後 3 者は地域担当の普及指導員のみを対象に実施された)。

結果②:表 13 に示すとおり、状況改善度に、尊敬する普及指導員の持つ特徴の数との正の相関が見られた。このことはすなわち、尊敬する普及指導員が多くの特徴を持つ人物であればあるほど、回答者本人も過去の事例においてよい成果を残していたことを示している。また、Pearson の相関係数では有意ではなく、Spearman の順位相関係数でも有意傾向にとどまったが、地域住民満足度も有意傾向の正の相関を示した。以上の結果は、尊敬対象となる普及指導員の持つ特徴の幅広さによって、他の普及指導員の活動パフォーマンスも左右されることを示している。

表 13. 尊敬する普及指導員の持つ特徴の数と回答者本人の普及活動パフォーマンスの相関

	Pearson	Spearman
地域住民満足度	.09	.11 †
状況改善度	.16 **	.19 **
地域住民の信頼性・信頼感	.10	.07
地域内の問題に対処する自己能力	-.02	.01
地域の暮らし向き	-.07	-.08

† $p < .10$, ** $p < .01$

また、尊敬する普及指導員の特徴について、41 項目を項目内容から判断して 8 カテゴリーに分類した。どの項目がどのカテゴリーに分類されたかを表 14-1 に示す。カテゴリーごとの得点と、回答者本人の普及活動パフォーマンスとの関係を検討した(表 14-2, 14-3)。全体的に、Pearson の相関係数(表 14-2)より Spearman の順位相関係数(表 14-3)においてより強い相関が得られているが、パターンはいずれの相関係数でも同じであった。まず、地域住民満足度に対しては、「視野の広さ」「統制・育成」「情熱」が有意な効果を持っていた。状況改善度に対しては多くのカテゴリーが有意な効果を持っていたが、特に「視野の広さ」「統制・育成」「ネットワーク・連携・共同作業」に他より強い効果が見られた。「知識・技術」は、回答者本人のパフォーマンスには正の効果を持たず、地域住民満足度には負の効果

さえ持っていた。現在の担当地域でのパフォーマンスを表す「地域住民の信頼性・信頼感」「地域内の問題に対処する自己能力」「地域の暮らし」に関しては、ほとんど相関が見られなかった。なお、尊敬する普及指導員の特徴同士の相関(カテゴリー間の相関)に関しては、表 15-1 (Pearson) および表 15-2 (Spearman) のとおりであった。全てのカテゴリー間に有意な正の相関が見られた。

表 14-1 尊敬される普及指導員の特徴の分類

知識・技術	知識や技術を実際に活かす 多くの知識・技術を持っている
人を育成・統制する力(統制・育成)	知識や技術を伝えるのがうまい 説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる 人を育てる力がある 農家や関係者に働きかけて成長を促そうとする 地域のリーダーを見つけ、育てる 人を引っ張り統率し、方向転換させる指導力がある その人の存在によって周囲に最善の行動を促すことができるカリスマ性
他者志向	農業者の視点に立ち、相手の心を理解しようとする 農業者に自分が何を提供できるのかを考える 農家や関係者のニーズに応じて支援したいという願望が強い 消費者の視点で考える
情熱	熱意・情熱をもって人に接している 強い信念を持ち、困難なことがあってもあきらめない 情にもろい
ネットワーク・連携・共同作業	新しい人間関係やネットワークを積極的に構築する 地域の中にいろいろな人脈を持っている 構築された人間関係をメンテナンスし、長期にわたり保持する 助言や情報提供してくれている人を多く抱えている 地域の関係機関と連携し、それぞれの役割分担を行う 周囲と連携してチームワークを形成する 普及センター内や他の普及指導員と連携し、普及組織内で自分の役割を全うできる 地域全体の中での自分の役割を理解し、全うしようとする 研究機関と連携し、問題解決に必要な研究を進めてもらう
決断力・行動力	決断力がある 自ら進んで物事に取り組む 先例がないことにも進んで取り組む
視野の広さ	物事を局部ではなく大所高所からとらえる 時代の流れを読み、将来に向けてのビジョンを提言する 地域全体が目指す目標や、要求する行動基準をよく理解する
緻密性・冷静さ	問題の局部を分析し、本質を緻密に解明する 冷静に自分をコントロールできる 細部に神経をつかい、完璧にやろうとする 問題解決又は目標達成のために必要な取組を順序立てて企画する

分類に収まらなかった項目: 「状況を的確に判断し、臨機応変に行動を変える」「信頼・尊敬の念で周囲から見られる」「とらえどころのない現象の中から大事な問題が何かを見つけ出す」「自分の能力を信じている、自信がある」「その人の存在によって周囲が明るくなるカリスマ性」「常に話し合いの中心に位置し、話題を提供する」
なお、各カテゴリーの内的一貫性を検討するべく、カテゴリーごとに信頼性分析を実施した結果、 $\alpha = .65 \sim .86$ であった。

表 14-2. 尊敬する普及指導員の持つ特徴(カテゴリー得点)と回答者本人の普及活動パフォーマンスの
 相関(Pearson)

	知識・ 技術	統制・ 育成	他者 志向	情熱	ネットワー ク・連携・ 共同作業	決断力・ 行動力	視野の広さ	緻密 性・冷 静さ
地域住民満足度	-.09	.12 †	.03	.10	.06	.07	.14 *	.00
状況改善度	-.02	.19 **	.12 †	.13 *	.19 **	.17 **	.19 **	.08
地域住民の信頼性・信頼感	.07	.10	.15 †	.08	.06	.12	.01	.05
地域内の問題に対処する自己能力	-.12	-.01	-.05	.06	-.01	-.13	-.04	-.03
地域の暮らし向き	-.05	-.06	.04	.08	.02	-.07	-.10	-.11

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

表 14-3. 尊敬する普及指導員の持つ特徴(カテゴリー得点)と回答者本人の普及活動パフォーマンスの
 相関(Spearman)

	知識・ 技術	統制・ 育成	他者 志向	情熱	ネットワー ク・連携・ 共同作業	決断力・ 行動力	視野の広 さ	緻密 性・冷 静さ
地域住民満足度	-.12 †	.14 *	.07	.14 *	.12 †	.09	.15 *	.04
状況改善度	-.01	.21 **	.16 *	.17 **	.21 **	.19 **	.22 ***	.12 *
地域住民の信頼性・信頼感	.02	.11	.11	.06	.05	.07	-.01	.04
地域内の問題に対処する自己能力	-.12	-.01	-.05	.05	.00	-.14 †	-.01	.00
地域の暮らし向き	-.11	-.08	.02	.04	.03	-.08	-.11	-.12

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表 15-1. 尊敬する普及指導員の持つ特徴(カテゴリー)間の相関(Pearson)

	統制・ 育成	他者 志向	情熱	ネットワー ク・連携・ 共同作業	決断力・ 行動力	視野の 広さ	緻密性・ 冷静さ
知識・技術	.46	.39	.41	.43	.40	.38	.37
統制・育成		.70	.67	.72	.64	.61	.57
他者志向			.65	.71	.61	.60	.64
情熱				.65	.67	.54	.52
ネットワーク・連携・共同作業					.60	.56	.63
決断力・行動力						.61	.57
視野の広さ							.64

全て $p < .001$

表 15-2. 尊敬する普及指導員の持つ特徴(カテゴリー)間の相関(Spearman)

	統制・ 育成	他者 志向	情熱	ネットワー ク・連携・ 共同作業	決断力・ 行動力	視野の 広さ	緻密性・ 冷静さ
知識・技術	.45	.38	.39	.41	.40	.40	.36
統制・育成		.70	.67	.72	.65	.62	.56
他者志向			.65	.70	.61	.62	.63
情熱				.64	.67	.55	.51
ネットワーク・連携・共同作業					.60	.57	.63
決断力・行動力						.62	.57
視野の広さ							.64

全て $p < .001$

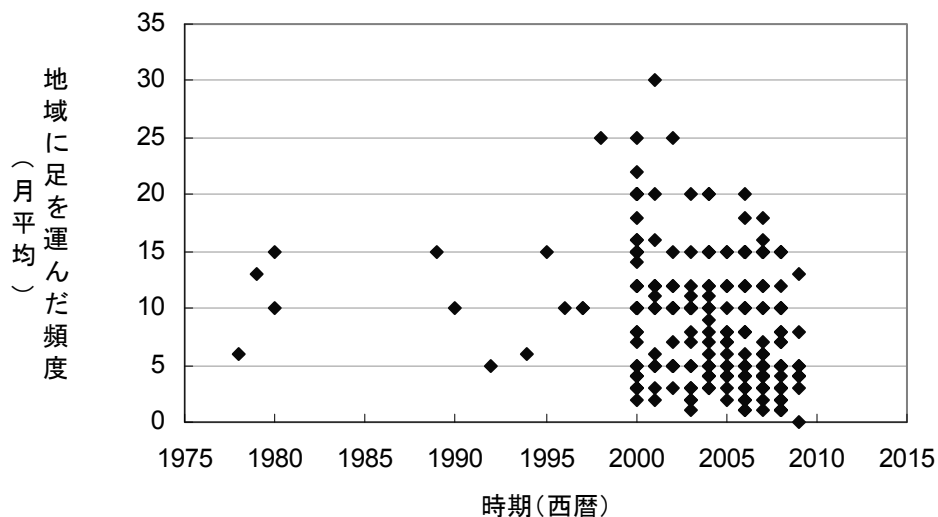
11. 地域に足を運ぶ頻度の減少について

目的: 普及活動に関する報告書では、普及指導員の担うべき行政関連業務の増加などのために、実際に地域に足を運ぶことが難しくなっているとの声が多く寄せられている(e.g., 近畿ブロック普及活動研究会の平成 20 年度調査研究報告)。本調査の結果でも、普及指導員が実際に地域に足を運ぶことが困難になりつつあることが示唆されている。この点を検証した。

方法: 自分が難しい課題に直面した経験において「実際に地域に足を運んだ頻度(月平均回数)」を尋ねた。

結果: 「自分が難しい課題に直面した時期」を横軸に、その事例において「実際に地域に足を運んだ頻度(月平均回数)」を縦軸に散布図を描くと、図 23 のような結果になった³¹。明らかに、時期が新しくなるとともに、地域に足を運ぶ頻度が減少していた(Pearson's $r = -0.27, p < .001$; Spearman's $r_s = -0.34, p < .001$)。また、項目 8 「普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因」で述べた通り、50 代での地域に足を運ぶ頻度の減少が見られ、管理職になるに従って現場に赴く頻度が減ってしまわざるを得ない状況があると思われる。農業者に直接会って普及活動を行う時間の長さは、普及指導員本人の感情経験にも影響し、ひいては普及指導員としての仕事の動機付けにも影響することが考えられる。その意味でも、地域に足を運ぶ頻度が減少していることは、現在の普及指導員が抱える重要な問題であると考えられる。

図 23. 事例の時期とその事例において地域に足を運んだ頻度の関係



³¹ 本調査は SurveyMonkey 社のサービスを利用して WEB 上に質問票を設置するとともに、Excel で同様の質問票を作成し、そのいずれの方法でも参加できるようにしてデータを収集した。WEB での質問票では、「自分が難しい課題に直面した時」の時期の選択肢を西暦 2000 年以降に限定したが、Excel の質問票ではそのような制限を設けなかった。図 23 では 2000 年以前のデータ数が極端に少ないが、その原因は WEB での質問票における設定にあると考えられる。

12. 総合考察

1) 尊敬される普及指導員について

尊敬される普及指導員がいると回答した人が大多数であり、職場に何らかのロールモデルがあることが示唆された。このことが普及指導員としての職業意識やモチベーションに重要な役割を果たしていることは、業務内で感じる感情経験の影響からも明らかであった。10年ぐらい上の人を尊敬対象として選ぶ傾向については、「10年で普及指導員として一人前という感覚があるため、最も身近な尊敬できる対象はそのぐらいの年次の人になるのでは」という意見があった。ロールモデルとなる普及指導員は、ある程度熟達した姿を見せている対象ということができよう。現場への同行や若手研修には、10年ぐらい年次の上の普及指導員を指導役として当てることには意味があるかもしれない。その場合にはロールモデルとできるよう、男女双方の普及指導員がその役にあたるとよりよい効果が期待されるということも考えられる。今後は研修指導との関連についても検討していく必要があるだろう。

尊敬される普及指導員の特徴としては、説得力と実践力で人を動かす力を持つ人物であるということが挙げられた。普及指導員は技術を伝えるという役割を持っている中、その技術をいかにして伝えるか、というコミュニケーション能力、さらには相手の気持ちやニーズを的確に理解する洞察力が、その技術力を「伝える」ために不可欠な力として理解され、尊敬されているということができよう。技術力とコミュニケーション能力が両輪として機能しているような普及指導員の姿は、若手の育成にも欠かせないと考えられる。どちらかに偏るのではなく、技術を持つことで安心してコミュニケーションができる、またコミュニケーションを通して技術をうまく伝える、ということが大切であろう。

「説得力のある言葉や行動を通じて相手を納得させる」など、普及員のコミュニケーション能力や「時代の流れを読み、将来に向けてのビジョンを提言する」というビジョン呈示能力については、本人のキャリアとともに「尊敬できる人が持っている特徴」として挙げられることが多くなる傾向があった。人間力のある普及員の姿は、キャリアを重ねることにより、より評価されている、つまり、重要視されているようになっていくということがわかる。これに関して、平成20年度近畿ブロック普及活動研究会の報告によると、若手の普及指導員はより技術を身につけたいと感じているのに対し、ベテランの普及指導員は若手にはコミュニケーション能力が足りないと感じているという結果が示されていた。この世代間での認知の違いは、普及経験がもたらす「尊敬すべきロールモデル」の違いとしても表れている可能性がある。若手の人は技術力を通して自信を身につけたいということであろうが、コミュニケーションとセットで学ぶことにより、成果が期待できるのではと考えられる。

今後は他業種との比較検討を通して、果たして「説得力と実践力で人を動かす」ことは普及指導員に特有の目指すべき特徴であるのか、それともそれは他業種に於いてもあてはまることなのかどうかを探る必要があると考えられる。

2) 地域の抱える問題のタイプと有効な支援について

地域の抱える問題としては生産技術に関するもの、次いで、農業者の収益・経営状況や、

地域全体の活性化に関わる問題が多くあげられていた。普及指導員が地域から求められ、頼られる場面の多くは、生産技術の指導に関連することであるといえよう。普及指導員の支援はこれに対応した形になっており、生産技術の紹介と関係機関との連携調整活動がよく行われていた。尊敬される普及員はこれに加えて、農業の担い手育成や望ましい産地育成など、個別の農業者の問題だけではなく、「地域全体の育成や振興」に関わるような支援を行っていた。

それぞれの問題のタイプごとの有効な支援を見た結果、①関係機関との連携調整や農業者同士の連携など、いわゆる「つなぐ」普及活動が、多くのタイプの課題において地域住民の満足度や状況改善度に大きな効果をもたらしていた。また、②尊敬される指導員が行うような「地域全体の育成や振興に関わる普及活動」が地域にもたらす効果も大きかった。さらに、③生産技術に関する問題に対して、その直接的な支援ともいえる「生産技術の紹介」は、地域住民満足度にも状況改善度にもあまり効果を持っていなかった。また、農業の担い手不足の問題に対しても、直接的な対処である「農業の担い手育成」の支援の効果は必ずしも強くなく、「関係機関との連携調整」がより強い効果を持っていた。

上記①については、やはりつなぐ支援や地域のコーディネートに大きな意味があることが示唆された。たとえば、新しい技術を導入するときの場面について考えてみる。新技術の導入は、たとえ理論的・技術的に信頼できそうなものであったとしても、新規であり実際の積み重ねがないため、もしかしたら作物がうまく生育しないかもしれず、導入には心理的・経済的コストのかかる状況である。コストのかかる状況に、有志の農家個人単位で取り組んでもらうことは非常に難しいであろう。そのような場合に、たとえば地域全体で新技術を導入し、ある人の畑で行った新技術がうまくいかなかった時には地域全体でその負担を分担する、あるいは、地域全体で新技術導入のための援助金を行政に申請する、など、地域全体でのセーフティー・ネット作りや、関係機関との連携は重要になるだろう。地域と関係者の連携により、農業者個人の心理的・経済的コストが軽減され、新技術の導入がうまくいくということがあるのではないかと考えられる。

③にあげられたように、問題に対する直接的な支援が効果を持たないことはある種パラドクスのである。これについては(a)直接的な対処だけではなく、人や関係機関をつなぐことを通じて初めて直接的な対処が生きてくる、という可能性、それから(b)実際に経験した困難な状況を思い浮かべて回答してもらったが故に、「(機能すると期待されるはずの)直接的な支援が機能しなかった」ような困難な状況が思い浮かべられて今回は回答されていた(つまり、通常の状態では直接的な対処は効果を持っている)可能性が考えられる。この(b)について、実際に直接的な対処を行ったけれど、状況改善度や地域住民満足度が低かったような場合に、「困難度」が高く認識されているかどうかについて追加分析を行ってみたが、(b)の可能性を支持するような分析結果は得られなかった。このため、(a)の可能性が有力であると考えられるが、この点についてはより詳細な検証も必要であろう。

3) 地域の抱える問題のタイプと普及指導員の必要とするサポートについて

ほとんどの普及指導員が誰かに助けられたことがあると回答しており、援助者として最も多かったのは普及指導員や農業者・地域のリーダーであった。受け取ったサポートが状況改善度や地域住民満足度に与える影響の効果は必ずしも一定しなかったが、全般的に地域のリーダーのサポートの効果が大きかった。このことは、普及指導員の支援業務において、地域のリーダーからの理解と協力が得られるかどうか重要な要因であることを示している。普及指導員から受け取ったサポートは、状況改善度や地域住民満足度に直接的な効果をもたらすというよりは、むしろ本人の心理的な安心感などの感情状態に影響している可能性がある。

今回の調査では、援助者である普及指導員が、どういった立場の人なのかを明確にすることができてなかった。さらに、これまでの社会心理学でのソーシャル・サポート研究では、誰が、どういった種類のサポート(たとえば、励ましなどの情緒的サポート、情報伝達などの情動的サポート、物品等の貸し出しなどの道具的サポート)を提供してくれるのか、ということを検討することが必要であるとされている。同僚や先輩からは情動的サポート、地域のリーダーや家族からは情緒的サポート、というように、それぞれ援助者とサポートの内容によって期待できる効果が違っているかもしれない。これらの点については今後の検討が必要であろう。

4) 普及活動の必要性

普及活動の必要性については、いずれも良好な結果であったと言える。状況改善度については「少し改善した」「かなり改善した」を合わせると70%を超え、地域から必要とされていたかどうかについても「少し必要とされた」「とても必要とされた」を合わせると70%近くに達した。また、地域住民満足度についても平均で見ると「50点」よりも高い満足度を地域住民が得ていたと回答されていた。この結果は、普及指導員自身が、普及活動を通じて何らかの手段で(直接的、あるいは間接的、暗黙に)関わっている農業者や地域の人たちから感謝をされたり、必要だと言われたり、実際に状況が改善したことを認識できるような状態にあったことが示唆される。ただし、この結果は普及員自身が回答したものであるため、「高く見積もりすぎる」あるいは逆に「低く見積もりすぎる」等、実際の状況改善や地域住民の満足度とは多少異なっている可能性があることは否めない。今後普及指導員の仕事内容への評価という点においては、農業者や関係機関への調査が必須となるであろう。

しかし今回の研究においては、先に述べたような普及指導員の評価が単なる本人の主観的なものだけではないことが示唆されている。それは、地域への関わりが長い方が、「地域の暮らし向き」がより良いと報告されていたことである。この指標は普及活動を持続させ、特定の地域等での業務が長くなるほど、実際に地域の人から評価され、状況も改善していることを示している。普及活動においては、配置転換や異動により、一つの地域での継続した活動が困難であるという状況もあるということであるが、一つの地域でどれぐらいの期間活動を行うと実際に効果的であるのか、ということについて、さらなる検討を行うことも必要

ではないかと考えられる。

5) 普及指導員が業務の中で感じる感情と、それを規定する要因

業務の中でどのようなときにポジティブ感情やネガティブ感情を感じるのかということは、本人がいかなるモチベーションをもって業務を行っているのかを知る重要な指標である。性別による差は全体的に見られなかったが、世代差では 40 代から 50 代にかけてネガティブ感情が軽減される方向にあることがわかった。

普及指導員は、尊敬する普及員がいること、地域住民の信頼性・信頼感が高いこと、問題に対処する自己能力が高いこと、地域の暮らし向きが良いこと、地域内に親密な関係が多いこと、農業者に会う時間が長いこと、によつてのポジティブ感情が高められることが示された。中でも特に、「地域住民の信頼性・信頼感が高いこと」はポジティブ感情を最も強く規定する要因であった。このことから、普及指導員の業務内での喜びや幸せは、地域の関係がうまくいっていることであり、普及指導員自身が、心理的に地域にコミットしている(地域の良好さを自分の喜びとしている)ことが明らかにされたといえよう。心理的に地域にコミットしている普及員であればあるほど、地域住民の信頼性もさらに高くなるのかどうか、今後の検討が必要であろう。

ネガティブ感情を減じるものは、地域住民の信頼性・信頼感、問題に対処する自己能力であり、とりわけ問題に対処する自己能力は重要な要因となっていた。自己能力が高く自信をもって業務を行う普及指導員は、不安や悲しみを引き起こすような失敗経験を減じている可能性がある。

このような業務内での感情経験の指標は、全般的な「業務満足度」と併せて今後検討していく必要があるだろう。

6) 若年者ステレオタイプと OJT の必要性に関する結果

年齢と「地域内の問題に対処する自己能力」や「地域の暮らし向き」との関係を見ると、これらの間には相関が見られなかったが、「地域住民の信頼性・信頼感」は年齢と正の相関を示した。年齢の高い普及指導員ほど、キャリアとは独立に、地域の社会関係資本構築という普及活動の重要な側面で高いパフォーマンスを上げていることを示していた。つまり、普及指導員としてのキャリアが短くても、年齢が上であれば、若い普及員よりは地域の関係の構築がうまくいっていることを示唆していた。逆にいえば、年齢の若い普及指導員は、年齢の高い普及指導員ほど地域の社会関係資本の構築には貢献できていない可能性があり、上述の若年者ステレオタイプについての仮説を支持する結果となった。また、若年者へのステレオタイプ(若い者は頼りない)だけではなく、女性に対するステレオタイプも存在するかもしれない。女性だからこそ、優しい、話を聞いてくれるのではないか、というようなステレオタイプがあるとすれば、女性普及員特有の現象もあるかもしれない。今後検討の余地があるだろう。

若手の普及指導員が抱える悩みなどについては、近畿ブロックの平成 20 年度の普及活

動研究会報告資料で検証されている。それによると若手普及指導員は、自分には技術力が足りないと考えている傾向が強いとされている。それが結果として自信のなさにつながっている可能性がある。加えて、農業者が「若い、ゆえに頼りない」という反応を示すことがあるならば、自信がますます減じられているということもあるだろう。この点は、現場に先輩普及員とともに行く、「OJT の必要性」を示唆している。現場でネガティブな反応があった場合の心理的なインパクトは大きいものであり、そのためにますます自信が失われてしまう、自信が失われてしまうが故にさらに信頼される振る舞いができなくなってしまう、いわゆる「予言の自己成就」(＝自信のなさなど、自分に対する仮説“もしかしたらできないかもしれない”が現実“実際にできなかった”になってしまう)と呼ばれる現象が起こる可能性がある。失敗のインパクトを減じ、農業者の安心感を高め、さらには先輩の現場での対人的な力を「見て学ぶ」ことが若い普及指導員には重要ではないかと考えられる。毎回の現場訪問に2名以上であたるのは現実的に不可能だとしても、最初の場面や大切な局面など、何らかの場合には2名以上であたるのが、長期的にはコストを下げる可能性があるのではないだろうか。

OJT の必要性に関しては、尊敬する普及指導員が多くの特徴を持つ人物であれば、回答者本人も過去の事例においてよい成果を残すという結果からも示唆されている。多くの特徴を挙げることができるということは、その人の働きぶりを観察し、現場での人に対する働きかけについても理解している必要があるだろう。先輩の働きぶりを知る経験を持つの方が、自分自身が普及活動においてよい成果を残すことができるというのは重要な結果であると思われる。また、特に「視野の広さ」「統制・育成」「情熱」「ネットワーク・連携・共同作業」など対人的な側面において良い特徴を持つ先輩がいると本人も良い成果を残すことができ、知識や技術ではこの効果は見られなかったことから、先輩からの技術の OJT だけではなく、その技術を農業者に「いかに伝えるか」と言うことに関する研修や OJT が必要と考えられる。若手普及員が支えられていると感じ、農業者にも安心感を抱かせ、さらに対人的コミュニケーション能力の向上にもつながるような OJT のあり方の検討が必要であろう。さらには、若手の普及指導員をいかに励ますか、先輩のスキルの研修などもあってもよいかもしれない。

7) 地域に足を運ぶ頻度の減少について

普及指導員の担うべき行政関連業務、事務的業務の増加などのため、実際に地域に足を運ぶことが難しくなっているとの声が多く寄せられており、本調査の結果でも、普及指導員が実際に地域に足を運ぶことが困難になりつつあることが示唆された。特に、50代の管理職業務に当たる人では、現場で過ごす時間帯の割合は減少している。

現場に頻繁に通うことは、農業者からの信頼獲得につながることで予測される上に、普及指導員自身のポジティブ感情、つまり、「仕事が楽しい」と感じる感覚にも影響している。さらに、現場に足を運ぶことにより、農業者から学ぶこともあるかもしれない。地域に足を運ぶ頻度が減少していることは、現在の普及指導員が抱える重要な問題であると考えられる。

効率化を目指すことが非効率的な結果を招くことにならないような仕組み作りが求められているのかもしれない。

8) 今後の課題

今回の近畿6府県での調査結果を受けて、次年度以降、全国での調査を行う予定である。全国調査ではより大規模なデータから、具体的な分析、さらには地域ごとの分析も可能になるだろう。その際には普及指導員からの研修やサポート、職場でのコミュニケーションの効果、さらには普及指導員のパーソナリティについての検証も行っていきたい。さらには、近畿6府県下で再調査を行うことにより、普及活動による地域の変化についても分析を加えることができる。

また、特に「尊敬される先輩の姿」に関しては、他業種との比較を通じて、普及指導員の特徴を知る必要があるだろう。そして、普及活動の効果の検証という意味では、農業者や関係機関への調査は必須の事象となると考えられる。今後はこのような調査も視野に入れた枠組み作りをしていきたい。

9) まとめ: 地域と人を結びつける普及活動について

普及活動では、技術力とコミュニケーション能力が両輪として機能してなりたっているといことが、あらためてこの調査を通して示唆されたのではないかと考えられる。平成21年度の近畿ブロックでの普及活動研究会報告資料では、普及活動では「スペシャリスト機能とコーディネーター機能」を発揮した活動が求められていると述べられている。本人自身が地域に心理的にコミットし、「立場の違う仲間」として、現場で地域の動機付けを高めていく。その言葉が説得力を持ち、あらたなビジョンを呈示するものであるとき、地域の人と人、あるいは関係機関と地域が「つながり」、人の心や行動が変化するということが起きるのではないかと考えられる。

日本社会の中では、農を通じた地域のつながりや共同作業のあり方、協力の戦略が、日本の「相互協調的」メンタリティーをつくりあげてきたことが指摘されている。農業現場で人の心をつなぎ、人の行動に変化をもたらすような普及活動のあり方は、日本社会の中での様々な領域で援用される可能性も考えられる。たとえば医療や教育の現場でのコーディネーターの必要性も指摘されているが、そこでは普及活動のスキルを活かすことができるかもしれない。日本社会は特に、アメリカ等と比較して、暗黙の了解などのコミュニケーションツールが頻繁に用いられ、複雑な他者理解が要求され、それによって成り立ち、また、相互の結びつきを確認している文化である。日本社会でのコミュニケーションのあり方を見直す上でも、普及指導員のスキルの分析は、重要視されてしかるべきであろうと考えられる。

謝辞

本調査をおこない、また、報告書をまとめるに際して、数多くの方々のご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

まずは何よりも、調査に回答して下さった普及指導員の皆様に御礼申し上げたいと思います。京都大学こころの未来研究センターという、農業関連ではない分野の研究センターが主催する調査ということで、ご協力に際してはとまどいもあったのではないかと思います。日々の業務でお忙しい中、調査にご理解を頂き、ご回答を頂いたことに深く感謝いたします。

普及指導員の皆様には、平成 20 年度の近畿ブロック普及事業 60 周年記念シンポジウムをはじめとして、県や普及センターでの講演会、さらには現地視察を通じて、有意義な対話の時間を頂くことができました。普及指導員の皆様とお話することで、皆様の農業に対する情熱、普及活動への誇りを知ることとなり、今回の調査の原動力となりました。

また、本調査の依頼やとりまとめにおいて、ひとかたならぬお力添えを頂いた各府県主務課の皆様、平成 21 年度近畿ブロック普及活動研究会の皆様、予備調査へのご協力と貴重なコメントを頂きました平成 20 年度近畿ブロック普及活動研究会の皆様には御礼申し上げます。皆様のご協力無しにはここまでの調査にはできなかったと思います。普及活動研究会の皆様には貴重なご意見や貴重なアドバイスを頂きましたことにも、感謝申し上げます。

全国改良普及職員協議会の滝沢章様、農林水産省の石田大喜様には、本年度の調査、ならびに次年度の全国調査に向けて大いなるアドバイスを頂きました。次年度は本調査をさらに発展させ、よりよいフィードバックを行えるような調査研究としたいと思っております。これまでのご協力に感謝いたしますとともに、次年度以降のさらなる発展によりご恩返しができると思います。

最後になりましたが、本調査のきっかけを与え、研究を全面的にバックアップして下さった近畿農政局の皆様には御礼申し上げます。私たちが普及を知るきっかけを与えてくださいました福田尚子様はまさに「普及を普及」して下さったと思います。また、調査を実現可能にするために細やかな気配りを頂き、農業には素人の私たちに丁寧に対応して下さった柴辻伯親様、和田美穂子様に御礼申し上げます。本当に有り難うございました。

京都大学こころの未来研究センター
内田由紀子・竹村幸祐・吉川左紀子

参考文献・参考資料

近畿ブロック普及活動研究会 「『若手普及指導員の育成手法』に関する調査研究」 平成20年度調査研究報告 2009年

近畿ブロック普及活動研究会 「『普及指導員育成のためのOJTのあり方』に関する調査研究」 平成21年度調査研究報告 2010年

農林水産省生産局技術普及課 「農業者とともに歩む普及指導員」 2008年

ロバート・パットナム(柴内康文 訳) 「孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生」 柏書房 2006

全国農業改良普及支援協会(編) 「普及指導員養成マニュアル」 2006年

全国農業改良普及協会 「進めよう自己研修・職場研修：上手になろう普及活動の進め方」 全国農業改良普及協会普及情報センター 1992年